

Mineral

あなたが

ガン治療で死なないために

千島学説的

癌

代替治療と

NPO法人超ミネラル水普及研究会理事長 三橋 宣男 著

微量ミネラル

SUNMINERAL

監修 NPO法人 超ミネラル水普及研究会

NPO法人超ミネラル水普及研究会 理事長 三橋 宣男 著

あなたが

ガン治療で死なないために

千島学説的

癌

代替治療と

微量ミネラル

SUNMINERAL

はじめに

歌舞伎界の革命児と言われていた、中村勘三郎さんの、57歳という、早すぎる最期でした。

2012年の6月に、初期の食道がんが発見されたという。

なんで、半年そこそこで、彼は殺されてしまったのだろうか？

日本人の潔癖症、事大主義、大病院、有名な医者、権威ある医療常識、本人も含め、周囲の人たちの、癌に対する恐怖と無知。

こういうものが寄ってたかって、しかも善意のうちに、彼を手術に向かわせ、十二時間に及ぶ大手術と大量の輸血、手術中の抗癌剤の投与等、免疫・自然治癒力を削ぐような措置ばかりがとられたのだろうか、容易に想像がつく。

その結果、初期癌発見から、半年そこそこの死である。

直接の死因はARDSだというが、その前後で不適切な、彼の体と心に対する傷めつけが、どれだけ彼の自己治癒力を減殺したことか・・・

怒りよりも、この国の癌治療を取り巻く現状に、深い絶望感を感じる事件でした。

*ARDS…急性呼吸促進症候群 acute respiratory distress syndrome. 呼吸膜の過剰な漏れと深刻な低酸素状態が特徴の疾患で主に抗がん剤、抗リウマチ薬、血液製剤などでみられる。

あなたや、あなたの愛する人が、もし、癌といわれても、あわてることは何もありません。

脳溢血や、心臓病などは一刻を争う場合が多いですが、癌はそうではありません。大病院へ行かずに、評判の良い、漢方や、食事療法や代替治療を受けることを、まず考えてください。

日本には、まだ少数ですが、本当の癌の治療法を体得されている漢方医や、代替治療の専門家がいます。

私は、代替治療の有力な手段として、微量ミネラルの摂取を勧めています。それはとりもなおさず自己免疫力、自然治癒力の強化が、まず第一に必要なと思う

からです。

我々の微量ミネラルは大変強力な武器ですが、これが唯一の方法ではありません。

ただ、くれぐれも、大病院に、治療に行かないことをお勧めしておきます。

初期の癌など、ほっておいても、何十年も生きる例は多いのです。

できれば、食生活の改善、ストレスの解消、笑って暮らせる心の持ち方を心がけることで、これだけで、癌が自然退縮してゆく例も多いのです。

あなたの病を治すのは、薬でも、手術でも、抗癌剤でも、医者でもありません。

あなた自身の自然治癒力なのです。

このことを理解してもらうために、あえて千島学説に多くのページを割いています。

現代医療にとっては異説ですが、生命の本質に肉薄しようとする、千島喜久男博士の膨大な研究実績の一部だけでも、ご紹介できればとおもいます。

この本は、まず日本の一般の病院で行われている、現代医療によるガン治療（手術とそれに伴う輸血、抗癌剤、放射線）の危険性について説明しています。

慶応大学の近藤誠医師の「患者よ、がんと闘うな」以来の数々の著作と、少数ではありますがありますが、良心的な医師たちによって、現代医療による癌治療には、懐疑的な声があちこちで、あがっています。

そして、なぜ現代医療の治療ではガンが治らないのか、その本質的な問いに対しては、異説として封印されてしまっている、千島喜久男博士の膨大な研究の成果が答えを与えてくれます。

千島学説では、あらゆる病の原因は、気、血、動のバランスの欠如による、と説きます。

まず「気」⇨ストレス、精神的なもの、心がいかに大事かを説いています。

次に「血」⇨赤血球は腸壁の絨毛からでき、白血球に分化し、そしてあらゆる細

胞の母体になる。したがって腸をきれいに保つ「食」こそが治療の根本である、と説きます。

また、「動」―現代人にとっては、適度な運動が不可欠であり、同時に運動は爽快で、愉快的気分させることによって「気」にも良い影響を与える。

そしてこれらのことは、とりもなおさず、患者の自然治癒力を増強させることによって治癒させるという、理想的な結果につながるわけです。

以上の観点から、気―ストレス、血―食事、動―運動についての説明をしました。只、現代の社会生活において、厳格にストレスを排除し、食養生を貫くことは現実問題として、なかなか難しいものがあります。

そのような折にも、微量ミネラルの摂取が、細胞の活性化、免疫の増強等を通じて、患者の自然治癒力の増強に、著しい効果を上げることが、わかってきました。

これらのことをご紹介してありますので、自分の命は自分で守るのだという決意を持ち、そのための正しい知恵を、汲み取っていただければ、幸いです。

“超ミネラル水普及研究会” 理事長 三橋 宣男

ホームページ：<http://www.lmineral.com/>



目

次

目次

第一章 ガン呪縛とガン治療

次の事実をご存知ですか？	16
現代医療による癌治療の恐怖	17
千島学説をご存知ですか	23
ガンは、ほつておいたらどうなるのか？くじ引き割り付け検査について	34
千島学説的ガン治療への道	37
更に千島学説について	50
微量ミネラルについて	109

微量ミネラルでの治療体験

128

第二章 ミネラル水普及研究会とは

140

第三章 ミネラルとは

146

元素の発見と利用の歴史

148

生物進化の歴史と元素

150

生体に不可欠の微量元素（微量ミネラル）

153

海水の成分と血液の成分

154

超ミネラル水の成分

156

超ミネラル水はクラスタ―（分子）が小さい水です！

160

水分子（クラスター）とは何か、もっと詳しく説明してみましよう。

超ミネラル水は硫酸基を含む水です。

超ミネラル水の件

超ミネラル水賞味期限

優れた衛生設備を持つ株式会社クリアロックス

ミネラルバランス

ミネラルバランスの意味するもの

ミネラルを効果的に取入れるには

第四章 主要ミネラルの特徴

カルシウム（Ca）

161

163

164

165

167

169

170

173

176

177

マグネシウム (Mg)	178
鉄 (Fe)	179
リン (P)	181
銅 (Cu)	182
ヨウ素 (I)	184
マンガン (Mn)	185
セレン (Se)	186
亜鉛 (Zn)	189
クロム (Cr)	190
モリブデン (Mo)	192
カリウム (K)	193

ナトリウム (Na)

コバルト (Co)

ミネラルの所要量について

ミネラルと人体の関係

ミネラルの効果役割

超ミネラル水ボトルドウォーター

株式会社クリアロックスの技術

癌代替治療と微量ミネラル療法

おわりに

213 211 209 207 204 202 198 196 194

参考文献

215



第一章

ガン呪縛とガン治療

次の事実をご存知ですか？

- 1 医者で人間ドックを受ける人はいない。
- 2 欧米先進国には人間ドックのようなシステムはない。

なぜだかわかりますか？

お医者さんたちは「人間ドック」は殆んど意味がない、ということをよく知っているからです。

特に癌などは、レントゲンなどで目視でわかる段階で発見されても、現代医療の治療では、ほぼ手遅れです。

目視できる癌は、最低でも1cm以上、この時点で、がん細胞はすでに十億個以上、日々血液に流れ出し、全身に流れる癌細胞は、100万個といわれています。この段階で、体中のどこかに、がん細胞が定着してしまっても、おかしくありません。

また、「人間ドック」の検査で、特に問題がないといわれた人が、一年も経たずに死んでしまったり、癌の宣告を受けたり、というようなことを聞いたことがありますか？

欧米先進国でこんなことがあつたら、権利意識の強い被害者は、まず訴訟に持ち込みますので、病院がドンドンつぶれてしまいます。

日本の患者さんは、大病院やお医者さんの権威にとっても従順なので、仕方がないとあきらめます。

日本では、年間100万人以上の方が、病気で亡くなりますが三分の一が癌、三分の一は血流、血管、心臓などの疾患、残りの三分の一が、その他いろいろな病気という、分類になっています。

現代医療による癌治療の恐怖

最大の死亡原因であるがんの治療を見てみますと、日本では一般に三つの療法といわれるものが、定着しています。

手術、抗がん剤投与、放射線照射です。

しかし、結局のところ、あらゆる病気を治すのは、自分自身の持っている自然治癒力です。

薬が治すわけでも、手術が治すわけでもありません。

そういった意味では、特殊な場合を除いて、患者の体力、自然治癒力を削ぐ手術は、なるべく避けるのが賢明でしょう。

また抗がん剤治療は、ほとんど効果が認められないにもかかわらず、その副作用の強烈さは、いかに正常な細胞も傷めつけているかがわかります。抗がん剤治療は別名化学療法とも言われていますが、聞こえは良いですが、第一次世界大戦で使用されていた、猛毒ガスのマスタードガスそのものです。

*抗癌剤の恐怖については、「抗がん剤で殺される」船瀬俊介著 家伝社 に詳

しく述べられています。

現在、抗がん剤としては、アルキル化剤、抗腫瘍抗生物質、代謝拮抗剤、金属錯体、植物由来抗癌剤、分子標的治療剤の六種類が使われています。

これらは原則としては、どの薬も増殖する細胞を狙い撃ちにする猛毒ですので、増殖の盛んな骨髄、腸管上皮、皮膚、爪の根元、毛嚢等の正常細胞にも害をおよぼします。

そのため、白血球の減少、胃腸障害、悪心、嘔吐、脱毛、白内障、発疹等の各種皮膚疾患、爪の変形等の副作用が出ます。

抗癌剤治療を受けると、体中がだるくなり、吐き気がし、食欲がなくなり、痩せてきたり、髪の毛が抜けたりするのはこのためです。

そして、いったんはガン細胞を縮小させるかもしれませんが、三か月くらい過ぎると抗体ができ、猛烈なりバウンドが起こります。

このとき衰弱した自然治癒力では耐えきれずに、死んでしまう、という例も多い

のです。

また、放射線で癌細胞を焼き殺すという治療ですが、細胞は放射能を浴びると、アポトーシスといって、DNAを一挙に分断化し、自ら壊死するようプログラムされています。

この現象を利用して、癌細胞にアポトーシス、（細胞の自発的な死亡）を起こさせて、死滅させるのが放射線療法です。

この療法の問題点は、癌細胞の方が、普通の細胞に比べて、放射線治療に対して、耐性があるということです。

正常細胞の方が、癌細胞より先にダメージを受けてしまうのです。

つまり癌よりも周辺の正常組織の方が先に破壊されてしまうのです。

これによってさまざまの、急性障害と晩発性障害（長い潜伏期間を経て症状が現れる）がおこり、ただれや潰瘍、肺の繊維化、血管の閉塞、白内障、胎児障害、骨盤障害などが起こります。

このようにして生じた白血球の減少はなかなか元に戻らず、さらには新たな発が

ん性の危険も孕んでいるのです。

＊「癌では死なない」 鶴見隆史 鶴見クリニック院長 他三名共書 より抜粋
このような治療が定着してしまった背景には、がんは恐ろしいもの、悪魔のよう
な忌み嫌われるべきもの、といった、がんに対する、恐れと嫌悪から来る、呪縛
があるようです。だから、癌細胞を徹底的に除去し、あるいは毒殺し、焼き殺す。

そしてこのことから、集団検診などで、少しでも早くがんを発見し、早期に撲滅
しなくてはならない、という強迫観念に取りつかれているのではないのでしょうか。
しかしこの検診ですが、人間ドック等でがんを早期発見しても、その治療が間違
っているために早期に発見された人ほど、癌ではなく、ガン治療で、亡くなつて
しまいます。

しかしこれは日本人特有の潔癖症にもよりますが、自分の体にできたものは、一
方は良い細胞、他方は極悪の脂肪と、区別できるものでしょうか？

40歳を過ぎた人間の体には、一日に数千のがん細胞が発生しているといいますが、ただ免疫細胞が元気なうちは、即座にその免疫細胞にやっつけられて、定着してがんになるのを、ふせいでいます。

更に老化が進み、または体調の劣化で免疫細胞の力が減退するに従って、より癌の発生が促進されてきます。

高齢で亡くなった人の、50%位の方の体内には、平均して20mm程度の癌があるといえます。

もちろん、本人にはそんな認識はなく、家族なども、他の原因でなくなったと思われるのです。

しかし、癌と血液の疾患を超早期に（**採血健診**では3mmの癌が発見可能）発見し、手術、抗がん剤治療、放射線治療ではなく、正しい食生活と、生活環境を整備してストレスをためない生活をする事によって、あなたも、この恐ろしい死因から、逃れることができるのです。

*採血健診については、当団体のホームページ：<http://www.lmineral.com/>

千島学説をご存知ですか

生物学者の千島喜久男博士が、大胆な「がん細胞血球由来説」を発表したのは、1961年のことでした。

発表されたのは、慶応大学医学部の欧文雑誌で、英文論文にまとめられたものでした。

「がん細胞は病的になった赤血球が変化して生ずる、従来の、突然異変で発生した癌の細胞分裂によつて増殖するという定説はまちがっている」とそれまでの医学の常識を覆すような革新的な学説を発表しました。

赤血球は、全ての細胞になる、とする千島学説からすると、がん細胞も赤血球から生まれるということは、当然のことでしたが、この論文は、日本の国内の評価を受けず黙殺されます。

しかし、4年後にパリ大学のアルベルン教授が、千島博士とほとんど同じ内容の学説を発表し、フランスで大きな反響を巻き起こしました。

当時、パストール研究所の高名な血液学者ステファノポリ博士は、既に千島博士の論文を読んでいました。

そして、千島喜久男医学博士が、アルベルン教授に先行してこの学説を発表していたことを、フランス医学会に知らせ、フランスでも千島学説として認知されました。

しかし、結果としては、ヨーロッパ諸国の保守的な学者たちによって、この革新的な学説は、無視されることになってしまいました。

この学説と、従来の医学論理の根本的な違いは、人間の体の基礎である血液が、どこで生み出されているのか、と言うことです。

従来の医学論理では、「血液は骨髄から作られる」というのに対し、千島喜久男博士は「血液は腸から作られる」と主張したのです。

つまり、血液（赤血球）は骨髓から作られるのではなく、腸壁の絨毛で作られる、という説でした。

したがって、ガンという病気も、さまざまな要因、例えばストレスや、栄養バランスの悪い食事、といった要素が重なって、赤血球に異常が生じた場合に発症する病気、つまりは、**ガンが血液から起こる全身の病気である**ということを、千島博士は主張したのでした。

*よみがえる千島学説 粹山紀一 著 より抜粋

しかし、現在の医学論理の定説として、ガンは細胞から発生する病気である、ガン細胞は突然異変で発症し、それが猛烈な勢いで分裂や増殖を始めるという見地から、治療法などが生み出されています。

だからこそ放射線治療や、抗ガン剤といった療法が、あくまでも局地に出来たガン細胞をつぶす目的で行われています。

しかし、ガンという病気が、全身に流れる血液の異常から発症するのであれば、

現代医療による治療は、ガンを表層的に封じ込めたに過ぎないのです。

これらのことに関して、現在のガン治療が癌を治せない、ということことや、ガン患者の死亡率の高さからも、裏付けることが出来るのではないのでしょうか。何故なら、現在ガンは日本における、最も死亡率の高い病気となってしまうからです。

もし、先の定説の見地から、ガン細胞を潰す目的で、治療を施す現在の療法が有効であるならば、これほどの死亡の確率にはならなかったはずですよ。

それと同時に、千島博士が唱えたように、食物から血液が作られるという、見地からすると、現在の日本人の食生活は劣悪そのものといえるでしょう。

ファースト・フード、コンビニ、野菜に使われる農薬、そして牛や鳥の肥料に使われる材料など、直接的でなくとも、劣悪な食環境というのは、残念ながら、周りに溢れているといわざるを得ません。

それに、ガンだけでなく、糖尿病、高血圧、現在メタボリックと言う呼び名で、

注目されている症候群がありません。

やはり、内臓脂肪型肥満（内臓肥満・腹部肥満）に高血糖・高血圧・高脂血症のうち、2つ以上を合併した状態が悪化して動脈硬化などを生み出すと言うものです。

これらも、やはり現在の食生活の弊害と、現代人の不摂生から生み出される血液に直結した症候群であることから、いかに血液が健康の基礎として重要であるかが、解るのではないでしょうか。

そういった病気と血液の変調を照らし合わせると、千島喜久男博士の学説は非常に辻褄が合うのです。

このことに50年以上前に気付いたのが、千島博士でした。

しかし、医学会では、十八世紀当時の、ビスマルクに並ぶほどの政治力を持っていたといわれる医師、ルドルフ・ウィルヒョウが発表した、「全ての細胞は、他の細胞に由来する」という法則が確立されたのをきっかけとして、細胞学を中心

とした医学観が発達し、現在に至っています。

彼は、さらにガンに関して「ガンは、細胞の突然変異によって生じ、宿主（患者）を死にいたらしめるまで、無限に増殖を続ける」という論説を発表したことで、ガンに関する定説を決定付けてしまいました。

それが現代医学でも根付いてしまったことは、大きな過ちだったのです。

人間の体細胞は生命体で、気圧、温度、光線、湿度等が体内と異なった状態になったとき、急速に死への過程をたどります。

その死への過程においてのみ、細胞は分裂を始めるのです。

とはいっても、人々は未開の領域にある種の道ができると、そこをガイドにして、道の先に進みたがるものです。

なぜなら、どこへ行くべきか、ヒントを得ることができたからです。

しかし、それが現在でもまかり通ってしまい、ガン治療に対するお決まりのコース、手術、抗ガン剤治療と、放射線治療を持ってしても、ガンによる死亡率が、

減少する傾向が見えないのは、そういった医学論理が、根本的に間違っているからに、他なりません。

単純な話、それらの療法が効果を發揮していたのであれば、ガンによる死亡率はもっと、減少しているはずです。

今年、国立癌研究所の設立50周年に当たるそうですが、創立以来の総長の多くが、癌で亡くなっていますし、その間の予算といえば、数兆円ということですから、もし正しい方向に、これらの予算が使われていたら、とつくの昔に、有効ながんの治療法に、辿りついていたのではないのでしょうか？

千島博士はある日、顕微鏡でニワトリの卵の黄身を観察していました。

それは、ニワトリの卵の細胞を見るための作業でしたが、その時、彼は黄卵球が赤血球へと変化し、さらに生殖細胞に変化するところを目撃したのです。

細胞が分裂して細胞になるのではなく、赤血球が細胞になったところを・・・

このシンプルですが、それまでの定説を覆す変化に気付いてしまった千島博士は、そこからさらなる研究を行い、細胞は血球から生まれると言う論文を発表しました。

しかし、そこから千島博士と千島学説の苦難の道が始まったのです。

なぜなら、博士の発見は生物学や医学論理の核心を突いて一方で、ウィルヒョウの法則から始まった、医学の基礎理論を、根底から覆してしまうものだったからです。

しかも悪いことに、ウィルヒョウの学説から、100年近い年月が経過しており、あまりにもその定説の上で、医学が発達してしまっていたのです。

その間、あらゆる製薬会社、病院の経営、医療器具の開発、生物学の書物、医学書も、医学教育も、全てを根底から改める必要に迫られたのです。

その結果、学会に発表する前の論文での段階から、千島博士の学説は、否定的に受け止められました。

論文はなかなか受理されず、実際には圧力といつていい扱いを受けていました。

その結果、論文の正式受理の後に、十年以上もの間、放置されると言う事態にま
でなっていました。

問題は、この論文が実にシンプルな生物学の真理を突いていたことで、それまで
の何十年にも渡って研究されてきた医学や生物学がすべて白紙に戻される可能性
があつたからでした。

それが学会での発表となると、いよいよ困難さが深刻になります。
そして、千島学説が学会で発表される日は遂に訪れませんでした。

その代わりに千島博士が行つたことは、自身の学説を説いて回ることでした。

結局のところ、千島学説は、人間の体のシステムの本質を突いていたにもかかわ
らず、それが医学界の定説を、根底から覆してしまうことが危惧され、日本の医
学会から抹殺されてしまったのです。

もちろん、それは医学会や学会の保守的な側面をあらわにする結果にもなったの

でした。

だからこそ、千島博士はせめて自分の学説を説いて広めようと言う考えで、講演の依頼には、喜んで出向くようになり、それが彼の晩年までの活動となりました。もちろん、学会の一部にも彼の学説を支持する向きはありましたが、結果として黙殺される形となった以上、千島博士自身がその学説をこのような形で説くことができる機会が設けられたのは、ささやかな救いでもありました。

只、今一人、当時、東京齒科大助教授だった、森下敬一博士は、クロロフィルを、赤血球に作用させる（血球の大きなガマの赤血球を使って）実験をしました。

そして、赤血球が変化して、細胞核を持つ立派な1個の単細胞になり、その新細胞を染色してみると、立派な白血球だった、という事実を証明したのでした。

この森下氏の実験の成功は、「赤血球は細胞に変化する」という千島学説を完全に裏付けたものでした。

このことは、1957年、中部日本新聞に十段抜きという扱いで報道され、千島学説は、再びマスコミに取り上げられるようになったのですが、結果としては、学会の反応は、ますます冷やかなものになっていったのです。

森下敬一博士はその後、数々の食物と医療の国会証言で有名ですが、自然医学を提唱し、現在でもお茶の水クリニックの院長として、独自の自然療法を行っていきます。

当初は、千島学説の後継者として、期待されましたが、その後は、千島博士の名前は全く出てこなくなり、自らの学説のような言動をされ、千島博士のご遺族とのトラブルが、耳に入ってきます。残念なことです。

一方、千島学説は西洋医と異なり、食養生などを研究実践する、東洋医家達の理論的支柱として、深く浸透していったのです。

「ガン革命」の著者で断食療法で何百人の末期癌患者を救ってきた、有名な加藤清氏に、千島博士はこのように語って、世間やマスコミ等の非難に悩む氏を励ましたいたといっています。

我々は「事実の前には謙虚に頭を下げなければなりません。理論は後から付いてきます」。

ガンは、ほっておいたらどうなるのか？くじ引き割り付け検査について

多数の健康な人々にくじ引きをしてもらい、「検診するグループ」と「放置するグループ」とに分けて、十数年という歳月をかけて、その後の成り行きを観察したものです。

その結果、アメリカでのヘビースモーカーに対する肺がん検診に対する、2つの割り付け試験が実施され、そのいずれもが、検診群の死亡数が減らない結果となり、アメリカでは1987年に、がん検診を断念しました。

乳がんについては、スエーデンで45歳以上の女性4万2千人に、大腸がんについては、アメリカの4万6千人の結果が報告されていますが、どちらでも殆ど違いがないという結果になっています。

その他にも チェコの肺がん試験、カナダの50～59歳女性の乳がん試験、同40～49歳女性の乳がん試験、デンマークの大腸がん試験、イギリス大腸がん試験等、世界のあちこちでがん検診のくじ引き割り付け調査が行われてきましたが、いずれも其の有効性を示す結果は得られていません。

ちなみに日本では、くじ引き割り付け検査についても、全く行われたことがありません、にもかかわらず「早期発見、早期治療、がん検診のススメ」の大合唱です。おかしいとは思いませんか？

* 「ガン呪縛」を解く 稲田芳弘氏著 より一部抜粋

医療専門家たちが、がん検診を死守しようとするのは、歴然としています。

自分たちの生活のためです。

がん検診は、今や大勢の医療関係者たちの生活を支えています。

病院は検査の部分で稼ぐだけでなく、発見したがんを治療するところで、二重に稼ぐことができますから、今やがん検診は病院の大きな収入源になります。

そしてこのような真実については、大手のマスコミは決して書こうとしません。医療産業は、彼ら大手のマスコミの広告収入にとって、欠くべからざる存在であるからです。

そして従順で、何も知らされない国民は、一生懸命早期発見を願ひ、検診を受け続け、不幸にも早期に発見されたがゆえに、その間違つたがん治療によって、苦痛に満ちた、拷問付き死刑を宣告され、無残な死を迎えます。

そして、現代医療の治療に専念したがゆえに、正規の医者への指示に従つたがため

に、家族たちはあきらめるのです。

そして、現代医療の治療に専念することを、本人だけでなく家族や周囲も勧めます、その他の治療を試みるなど、とんでもないことだと、思い込んでいるのです。

癌をめぐる全ての環境が、癌の呪縛にかかっているかの如くです。

癌そのものより、この呪縛が、本当に恐ろしい・・・

* 「ガン呪縛」を解く 稲田芳弘氏著

* 「患者よガンと闘うな」 近藤 誠博士著

千島学説的ガン治療への道

1 腸壁の絨毛から赤血球が発生し、白血球に変化し、細胞として新生する。

2 これらの現象は可逆的で、その逆も起こりうる、すなはち、飢餓、大量の出血、食料事情が良くない時には、細胞は血液に逆戻りする。

千島学説は、その全集は膨大なものになりますが、医学だけではなく、生命弁証

法の哲学書といってもよい内容ですが、誤解を恐れずに、一言で言ってしまうすと、病気になるためには「気、血、動」の調和が全てであると言うことです。

気Ⅱストレスの無い生活

血Ⅱ正しい食生活による、きれいな腸壁から、きれいな血液が生まれる

動Ⅱ適度の運動

千島学説では、なぜがんが発生するかは、ガンは血液の汚れが原因であるとしません。血液の汚れが、その生命体に耐えられなくなると、その汚れた血液をせき止めるようにガンが発生する。

汚れた血液が全身に流れると数日で、敗血症（血液が腐敗する）で、ショック、DIC、多臓器不全などから、早晩死に至るのです。

*DIC：播種性血管内凝固症候群、血液が凝固しやすくなる。

この状態で、ガンは汚れた血液をせき止め、浄化するかのような役割を行います。癌細胞に流入していく血液は汚れていますが、がん細胞から流出していく血液は、きれいになっているという事実です。

癌は恐ろしい物質というより、むしろ健気にも、汚れた体の浄化に、一役買って来た、というべきなのかもしれません。

また、がんは切除しても、たとえば胃の大きな目立つがんを切ったとしても、他の部分に潜んでいた癌が、暴力団の縄張り争いのように、勢力を伸ばしてきて、再発してしまいます。

これは大きながんがあると、それを取り囲んで対抗すべく、かなり強く大きな抗体ができるからで、この強い抗体が、周りの弱小の癌を、封じ込めているといえます。

大きな勢力の強いガンが存在するときは、他臓器のがんは、おとなしくしていることが多いのです。

*医療法人 王子病院理事長 山口 寿夫医学博士談

千島学説の、がん対策は実に単純明快です…気、血、動のバランス。

大昔から日本の庶民の守ってきた健康法だったのです。

明治6年に、日本では医者とは、西洋の医者しか認めない制度になってしまいました。

西洋医学が果たしてきた役割は、非常に大きなものがあつたと思いますが、同時に、特に慢性病、生活習慣病には、かなり無力な対処法ではないかと思われま

す。その後も、折に触れて千島学説はマスコミの取り上げられることはありましたが、なぜか、朝日、読売、NHK、大手テレビ等、影響力の大きなところでは完全に無視しきつていようです。

医療、製薬、病気をめぐる巨大産業の、広告料は大手マスコミの大きな資金源であることは明白です。

千島学説から考えられる、最も有用ながん治療方法は…

●肉食をやめ、まず菜食を中心とした、腹6分目の小食の食事に徹する。

なぜ肉食が良くないかは、肉食をした時の腸内環境を見るとよく分かります。

肉、卵、牛乳は人間の消化管の中での吸収が悪く、腸内の腐敗菌などの、有害細菌を繁殖させます。

これらの細菌は腸内で繁殖すると、アミン、アンモニア、フェノール、硫化水素、インドール、スカトール等の毒素が生産されます。

そして、これらの毒素は血液に取り込まれて、体の至る所に炎症を引き起こし、癌が発生します。

腐るといふ字を見ると、「腑」に肉が入ると「腐る」になります。

内臓には肝臓、腎臓のように中身の詰まった「臓」と、胃や腸のように中身が空間の「腑」があります。

胃腸に肉が入ると腐るのは、この字がよく表しているとは思いませんか。

牛、豚、等の動物の肉の蛋白質は、そのまま、人間の体のタンパク質として取り込まれる訳ではありません。

一度、炭水化物に還元されてからしか、利用されないのです。

ところがこの還元作用がうまくいかず、蛋白還元酵素が胃腸に負担をかけ、また残留して体内で腐ると、血液の酸性化を招き、発癌のもとになるのです。

卵のタンパク質も、人間の消化管ではうまく処理できませんので、胃腸に負担をかけ、弱った腸壁をすりぬけて血液の中に入り込みます、それによってアレルギー体質になります。アレルギー体質は、とりもおさず癌体質です。

また、卵には、有害な物質の危険性が指摘されています。卵料理を大量に扱うコックは、頑固な頭痛、胃腸病等が多いのです。

これは、卵のコレストロールの高さ、消化酵素のトリプシンの働きを阻害する作用、ビオチンという、ビタミンの欠乏を引き起こす物質などが原因と考えられています。

二十四時間、蛍光灯を浴びせた不自然な飼育法、人工飼料、抗生物質、合成ホルモンなどで、白血病が疑われる母鳥の産んだ卵等々、多くの危険があります。

一方、牛乳も胃腸に負担をかけます、牛乳のタンパク質、カゼインは粒子が小さいので、腸の機能が弱った時には、腸壁を通り越して血液に混入してしまいます。このカゼインは、人間にとっては異種のタンパク質ですので、アレルギー反応を起こしてしまいます。

総じて、動物性蛋白質の取りすぎは、アレルギー疾患の原因になります。

子供のアレルギー体質、小児喘息、慢性湿疹等です。

またフランスのヴォーザン博士は、牛乳には無機の銅が非常に少ないので、血液中の酵素、カタラーゼの活性を減少させるといいます。

カタラーゼは、過酸化水素を水と酸素に分解する重要な酵素で、ガン患者は、この血液のカタラーゼの活性が、非常に低下していると言われています。

一般に、動物の歯は、その動物の食性を示していると言われています。

人間の成人の歯は三十二本、8本は門歯で、野菜等の繊維を噛み切るための歯

4本が犬歯で、動物性食品を引き裂くための歯

20本は臼歯で穀物をすりつぶすための歯です。

従って、32分の20(62・2%)は穀物のために

32分の8(25%)は野菜のために

32分の4(12・5%)は動物性食品 小魚類のためと考えられます。

殆ど90%近くを占める歯は、穀物菜食のためにあります。

そして、玄米は最高の主食です。

ビタミンA、B1、B2、B6、B12、ニコチン酸、パントテン酸、プロビタ
ミンC、ビタミンEなど栄養成分の宝庫です。

精米して、白米にして、おかずで補うのは不可能です。

いったん白米にしてしまったものは、胚芽とヌカと白米を混ぜても、生命力をもった元の玄米には戻らないのです。

玄米には、公害物質や放射能などを、抗公害成分であるフィチン酸などの働きで結合させて、腸壁からの吸収を防ぎ、排せつを促すので、公害物質を積極的に排除する力があります。

また、玄米には食物繊維がたっぷり含まれているため、便通を促し、便秘を解消し、腸内で食物が異常発酵し、発癌物質が吸収されないようにする作用があります。

詳しくは、食養生の本がたくさん出ていますので、そちらに譲りますが、簡単な、玄米の炊き方を、お知らせしておきます。

玄米ご飯の炊き方…玄米八、小豆一、ハトムギ一の割合で玄米の1.5倍の水で、で

きれば圧力釜で炊く。

よく嚙んで（一口100回程度は嚙む、消化のために我々ができるのは、嚙むことだけです。（胃腸に入ってしまったらなにもできないのです）

そしてこの良く嚙むことが、胃腸の健康にとって非常に大事で、腸内環境の整備、良い血液を造る基になり、ひいては良い細胞、良い生殖細胞ができる基盤にもなるのです。

*ガン「消去法」医学博士 森下 敬一著 自然の友社

食事療法の本はたくさんありますが、玄米菜食90%、動物性食品は小魚丸ごとを中心に、よく咀嚼して、腹6分目の小食で、が基本です。

●できれば、断食をして、汚れたがん細胞をいったん、血液に戻す（逆分化）させること。

今から50年近く前になりますが、大学を卒業するころに、過酷な雪の中でのアルバイトがたたって、慢性腎炎で入院したことがありました。

退院に当たって、内科部長という先生に、「慢性腎炎」は二度と治らない病気だから、普通の人生はあきらめて、体に負担がかからないような仕事を探したほうがよろしい、といったようなアドバイスを受けました。

血気な性格でしたので、かなりのショックを受けました。

その時に、蓄膿症で悩んでいた友人が断食寮に通ってすっかり良くなって、私にも断食を、勧めてくれました。

東海道線の茅ヶ崎という駅から、海に向かって15分ほど歩いたところにあった断食寮でしたが、結構、常時30人くらいの入寮者がいたでしょうか、私もここで30日程、生水だけの完全断食をしました。

90kgほどあった体重も55kgまで落ち、帰った時は近所の方も友人も、私だとわからないくらい変身してしまいました。

おかげで、慢性腎炎の症状も、蛋白尿も消え、その後50年近くは相当に乱暴な人生を生きてきました。

断食寮では、かなりヨレヨレで入寮した人が、元気で退寮してゆく姿を何人も目

にしてきました。

その後も調子の悪い時には、1週間く2週間等の断食を何度か経験してきましたが、一般に考えられているような、苦しいものではありません。

むしろ1週間く十日くらい経つと、頭や体がすっきりして、非常に清浄な気持ちに満たされてきます。

キリストやお釈迦様等の宗教家が断食をする意味が、理解できるようになります。

その当時は、千島学説のことは全く知りませんでした。今思うと、千島学説の第二原理（飢餓状態の時には体細胞から赤血球へ逆戻りする）が、見事にあてはまっているのを、実感できます。

● ストレスをためない生き方を工夫し、笑って暮らせるように努め、適度の運動を楽しむ。

いわゆる「氣」の話ですが、後にも出てきますが、千島博士も言われるように、

本当はこれが一番大事です。

そして現代医学が最も軽視しているところです。

最もストレスになるのは、不安、心配、恐怖、です。

お医者さんから癌を宣告され、ガン病棟に入院し、抗癌剤で苦しむ患者と接し、やっぱり再発して死んでゆく患者を、日々目にすることです。

これらの状況はどんなに精神的に強い人をも、癌にさせてしまうほどのストレスでしょう。

只、心の問題は、あまりにも深く、広い分野ですので、これについて語る資格を、私は持ち合わせていません。

アドバイスできることは、良い本をたくさん読むこと、良い話をたくさん聞くこと、良い音楽をたくさん聞くこと、良い映画をたくさん見ることです。

古典落語の名作集なんていいですね。

それと、宗派を問わず、まともな信仰を、持つことをお勧めします。多くの宗教家が、病気を治す奇跡が語られますが、私はかなりの部分、本当ではないかと、思っています。心が変わると、全てが変わるからです。

以上、千島学説的治療を説明しましたが、日常生活の中で、きちつとした食事管理、ストレスの抑制管理などが不十分な場合でも、微量ミネラル水を摂取することで、あなたの健康・免疫の増強に、十分な効果が期待できます。

更に千島学説について

千島学説は、現在でも医学会から正式には認知されていない学説です。むしろ、異端の学説として、学会では暗黙のタブーになっています。

しかし、ジャーナリストの稲田芳弘氏のベストセラー「ガン呪縛を解く」以来、国際弁護士の小島秀樹氏、元アナウンサーの舟橋慶一氏をはじめ、多くの人が、千島学説に基づく治療法で、癌等の難病を克服してきました。

また、癌専門医であるセントマーガレット病院の、酒向猛医師も、千島学説に基づく癌治療（食事指導等）を行うようになり、一層普及が進んでいます。

千島博士が発表した論文は数百編にもぼる膨大なものですが、それらをほぼ集約したのが『千島革新の生命・医学全集』（全10巻、五千頁＋総索引）です。

その中の第9巻は英文論文集で、全集の初版1000冊の中で一番早く売り切れられて、増刷したのがこの英文の「9巻」だったといえます。

ということは、世界にはたくさん「千島学説読者」がいたわけで、実は後出する、フランスのパスツール研究所のステファノポリー博士もその一人でした。

1 千島学説をさらに詳しく

千島学説とは、故千島喜久男博士（1899～1978）により1943～1950年頃に提唱された、新しい生命医学理論で、次の8つの原理からなります。

第1原理・・・赤血球分化説（赤血球は凡ての体細胞に分化する母体である）

第2原理・・・組織の可逆的分化説（飢餓状態、大失血等の緊急時には体細胞から赤血球へ逆戻りする）

第3原理・・・バクテリア・ウイルスの自然発生説（バクテリア・ウイルスは一定条件下で親細胞が無くても自然発生する）

第4原理・・・細胞新生説（細胞は細胞分裂ではなく、主として有機物から自

然発生する)

第5原理 . . . 腸造血説 (赤血球は、骨髓で造られるのではなく、小腸の絨毛で造られる)

第6原理 . . . 遺伝学の盲点 (遺伝は環境を重視し、後天的な獲得性遺伝、所謂「氏より育ち」を認め、生殖細胞もまた赤血球から生ずるとする)

第7原理 . . . 進化論の盲点 (進化の最重要な要因は共生である)

第8原理 . . . 生命弁証法 (生命現象を正しく観察するための科学的方法論)

千島博士は、これらの学説を、顕微鏡を用いた膨大な基礎研究から発見しました。

これらの原理は、どれも現代医学においては認知されてはいませんが、千島博士が自ら撮影した膨大な顕微鏡写真から、綿密な事実の積み重ねで、非常に説得力を持つ学説です。

参考までに、現代生物学、医学の基礎となる定説と比較してみます。

(カツコ)内は千島学説からの反論です。

一、漸進的変異による進化の否定 (定説では、癌は細胞の突然異変が原因であるとする。しかし進化は突然起こるのではなく、漸進的に連続的に起こる)

二、獲得性遺伝の否定 (定説では、ダーウインの進化論、メンデル法則をそのまま追認することとなります。その結果、米の品種改良などは遺伝しないとして、認めなくなります)

三、生殖細胞の体細胞由来説の否定 (定説では、生殖細胞は生殖細胞からしか細

胞分裂しないとすが、他の一般の細胞と同じく、赤血球から分化する)

四、生命自然発生の否定(全ての生物はその親からうまれる以外の、発生はあり得ないとする。そして感染した親細胞から、細胞分裂するとする。しかし千島学説では、生物は自然発生し得るとする)

五、細胞の新生説の否定(細胞は赤血球から白血球に、そして白血球から隣接する細胞に新生する。そして赤血球は腸壁で作られる。定説では、赤血球は骨髓にある「造血幹細胞」でつくられると言われていますが、「造血幹細胞」なるものを、誰も観たことはありません)

以上の五大否定論から成り立っています。

そして、其れが現在の学会の定説となっています。

2 千島学説の詳細

第1原理・・・赤血球分化説（赤血球は、全ての体細胞を生み出す母体であ

る）

従来の学説では、赤血球は赤血球で、他の細胞とは異なるという考えであった。

赤血球は、各種血球、即ち赤血球、白血球、血小板という、血液の血球成分のうち、99・9%以上を占めるといわれています。

その主な役割と生理学的特長は、

1 「体の各組織に酸素を運び入れ、それらの組織から排出される炭酸ガスを運び去る」いわゆるガス運搬の作用

2 老朽化した赤血球は平均115〜120日内外の寿命で、途中でその核を失い老化し、主に脾臓で破壊されるという。（千島学説では、破壊されるのでは

なく、白血球や他の細胞に分化するという、そしてその間には、多くの中間移行中の細胞があるとする)

千島学説においても、上記1、ガス運搬の作用は認めていますが、上記2は否定され、赤血球は次のような機能を有していると、考えられています。

3 赤血球は、全ての体細胞に分化する

○赤血球が正常な状態では

赤血球は、平均115日の寿命で死滅するのではなく、白血球に分化した後、全ての体細胞（脳、神経、心臓、肝臓、皮膚等）に分化する
そして、赤血球は、生殖細胞（卵子、精子）にも分化する。
いわゆる、「赤血球一元論」です。

また仮に、赤血球は、平均115〜120日の寿命で死滅するのであれば、普通の人は4〜5リットルの血液を持っていますので、その血液のうち115日で割

り算すると、毎日40cc前後、赤血球に換算すると約2000億個の赤血球が死滅し、それだけの赤血球を、毎日補充しなければなりません。

これだけの量の赤血球を、現代医学の通説のように、主に手足にある骨髄だけで生産できるのでしょうか。

手足を失った人は、生きてはいけない、のではないのでしょうか。

○一方、赤血球が病的な状態では

- ・赤血球は、癌細胞や全ての腫瘍細胞へ分化する
- ・炎症部の全ての細胞へ分化

・創傷部の治癒組織（瘢痕組織または結合組織）へ分化

*瘢痕組織…損傷を受けた皮膚や筋肉が治癒する過程で見られる硬い組織

つまり、赤血球は細胞の環境に従って、どんな細胞にでもなり得ます。

現代医学では、血液（赤血球）は「心臓 ↓ 動脈 ↓ 毛細血管 ↓ 静脈 ↓ 心

臓」(大循環)と流れ、血管外に赤血球が出ることはないと言われていました。

しかし、毛細血管を顕微鏡で丹念に見ていくと、毛細血管の隙間や終端から赤血球が浸み出し、飛び出し、白血球に変化した後、直接接触しているその組織の細胞に分化していく姿が認められます。

なお、赤血球には細胞核がありませんが、白血球(細胞核があります)に分化する際、赤血球の細胞質の中から核が新生する姿が観察されています。

また病的な状態では、赤血球は腫瘍細胞や癌細胞に分化します。

「癌細胞が赤血球から出来、栄養状態によっては赤血球に戻る」(後述の第2原理)ことは、千島博士に遅れること二〇年の、1975年1月4日の読売新聞の一面トップに、癌研究所、京大ウイルス研究所、国立がんセンターのそれぞれの研究成果として記載されています。

タイトルは5段抜きで、そこには、以下の大きな活字が躍っていたのです。

ガン細胞が正常に戻った

3つのグループが実験に成功

発生のメカニズム解明 完全治癒への希望

癌研究会癌研究所の菅野晴夫所長ら3人は、ネズミの赤血球からできたガン細胞に核酸（DNA）の合成を阻止する薬剤を加えると、ガン細胞が正常な赤血球に戻れることを発見しました。

また、京大ウイルス研究所の市川康夫助教授の研究では、ネズミの白血球性乳ガン細胞を、ネズミの胎児のセンイ芽細胞の培養液に接触させたところ、ガン細胞が2種類の細胞、つまり正常赤血球とマクロファージに分化したと発表。

*マクロファージ (Macrophage, $M\Phi$) は白血球の一種。生体内をアメーバ様運動する遊走性

の大食細胞で、死んだ細胞やその破片、体内に生じた変性物質や侵入した細菌などの異物を捕食して消化し、清掃屋の役割を果たす

さらに、国立がんセンターの穂積本男共通実験室長は、ネズミの乳ガン細胞をネズミの腹に注入後、8日目に、その腹水を白血球細胞に与えたところ、そのガン細胞が正常化したという。

いずれも「ガン細胞が正常な細胞に戻った」という点が共通しています。

独自にこの画期的発見をした5人は、**高松宮妃癌研究基金学術賞**を受けることになりました。

高松宮妃癌研究基金学術賞は、學術委員会の推薦と選考に基づいて、理事会で決定されると言います。

今から40数年前の当時は、かなりの学者が、赤血球から癌細胞に、また癌細胞から赤血球にという変化を認めて、そこに癌治癒に希望が見いだされたからこそ、

受賞が決定したのではないのでしょうか。

しかし、これらの受賞の基礎理論を発表した千島喜久男博士には、なんの評価もなかったのです。

そこで千島博士は受賞した5人にたいし、丁重に、彼が発表した英文論文を送り、次のような一文を添えたのです。

- 1 癌細胞の成り立ちや、その運命に対する私の学説をご存じだろうか？
- 2 あなたの論文に、私の学説を引用しておられるのか？
- 3 もしご存じでないのなら、私の学説をどう思われるか？

五人の名誉ある学者たちの反応は全くなく、千島博士は、完全に無視されたのです。

そして、受賞の栄誉だけはしっかりと受けたのである。

この癌細胞の変化のプロセスを、千島博士は「AFD現象」と名付けましたが、これと全く同じプロセスを経て、ガン細胞が培養実験できたことを発表し、一大センセーションを巻き起こした学者が、フランスにもいました。

先に触れましたが、それはパリ大学のアルペルン教授で、ガン細胞を培養して、その変化を顕微鏡で観察していたところ、なんと赤血球が寄り集まってやがて融合し、ついにはガン細胞と化したというのです。

この観察論文を、アルペルン教授が「MATCH誌上」に発表したところ、フランス学会からは大反響が湧き起こり、フランスのマスメディアも「ガン問題の重要なカギが、フランス人によって発見された！」と大々的に報道しました。

それは1965年のことでしたが、その当時のフランスの学会は、まだ比較的柔軟な姿勢をもって、この「革命的な新説」を迎えてくれたのでした。

千島博士は、知人からの手紙によって初めてその発表を知ることになります。

元パスツール研究所の研究員で、血液学者のステファノポリ博士は、千島博士に私信を送って、フランスの動きを伝え、敬意を表したのでした。

そして、そのステファノポリ博士はフランスの学会に対して、次のようにメッセージを發したのです。

ガン細胞の起源に関するアルペルン教授のこの発表は、すでにそれよりも5年前に日本人の千島教授が発見し、発表していることである。

従って、ガン細胞の起源の発見者はアルペルン教授ではなく、日本人の千島教授

であることを、広くフランスの学会に発表する。

これは科学研究上、発見の先取権が重要であるからであって、私はあえて科学者としての良心をもって、このことを広くフランスの学会に知らせたい。

ステファノポリ博士がこのように千島をサポートしてくれたのは、すでに千島学説を知っていたからでした。

千島は慶大医学部が発行する英文雑誌に『ガン細胞の起源』と題する英文論文を1961年に発表しました。

その論文をステファノポリ博士はすでに読んでいて、共感し支持したからこそ、わざわざ千島にアルペルン教授の発表の反響を伝えてきたのです。

* AFD現象による赤血球のガン細胞化、つまり千島の「赤血球分化説」と「細胞新生説」に対し、海外では種々の反響がありました。

まずソビエト医学アカデミーの正会員であり、医学アカデミー細胞研究所長レペシンスカヤ女史（腸壁造血説で当時のスターリン賞を受賞）やクリューコフ博士らが、千島学説に対する支持を表明し、またフランスでもこのように、ステファノポリー博士らが全面的な支持を表明したのでした。

当時のヨーロッパ諸国では、千島博士にノーベル賞の榮譽を、という声もあつたといひます。

現実に、ノーベル賞の医学生理学部門の候補として、ノミネートされたことがあります。

確かに、千島学説の八つの原理のうちの一つだけでも、十分にその革命的価値が認められるのです。

山中教授のIPS細胞の発見にもまさる、千島喜久男博士の、画期的な新学説だったのです。

* AFD現象とは、Aggregation (集合) 、 Fusion (溶け合) 、 Differentiation (分化発展) の頭文字を取ったもので (千島博士の造語) 、細胞や微小生物が寄り集まり、それが溶け合って、一つの細胞 (生物) に分化発展する、という意味です。

日本の医学界の無反応と、高松宮妃癌研究基金学術賞受賞者たちの、千島喜久男博士への無視は、フランスのステファノポリ博士の、**科学者としての良心の話**を聞くと、日本人として誠に恥ずかしい限りではありませんか。

今ひとつ、日本の医学界の重鎮の、エピソードをご紹介します。

血管外の組織間隙に浸み出し、飛び出した赤血球は、その他の脂肪、筋肉、すべての内臓や組織の場所で、直接接したその部分の細胞に分化します。

千島博士は赤血球から、それぞれの組織細胞に変化している姿、その移行像を確認して、この事実を「赤血球分化」と名付けました。

このことを、当時の日本血液学会の会長の、京都大学病理学教授であった天野重安博士に、語ったことがありました。

「そのようなことがあるはずがない。一度、精神鑑定をしてもらったらどうだ」

天野博士は頭から否定し、千島博士を気違い扱いしたのです。

さらに、

「あなたもあまり異説を唱えない方がいい。でないとなあなたが九州大学に提出した学位論文はパスしない。日本の血液学者はそう多くはないのだから、皆と歩調を合わせていったらどうか」

商売や政治の話ならわかりますが、真実を追求する学者としては、何とも寂しい話だと思わないでしょうか。

第2原理・・・組織の可逆的分化説（飢餓・断食・大量失血時等には、体細胞

から赤血球へ逆戻りする）

第1原理で、「健康で栄養の良い時は、赤血球は白血球に分化した後、各組織細胞に分化する」と言いました。そして健康は維持され、また、体力は充実して免疫は増強されるのです。

ここまでは、ソ連のレベシンスカヤも研究していました。

ところが、栄養不良や断食の場合、または大量の出血等の緊急時には、癌等の病的細胞も含め、各組織細胞は、赤血球に逆戻りします。

『赤血球の可逆的分化説』と名付け、これを千島学説の第2原理といいます。

この説は千島博士が独自に唱えた新説で、現在のところ追隨者もいません。これは、断食をすることで、腫瘍や癌細胞が消退ないしは縮退することからも、真実であることが伺われます。

また、ダイエットをすると脂肪がエネルギー源として利用（燃焼）されるために、痩せると現代医学では考えられていますが、千島学説においては、脂肪細胞が、より生命活動に重要な、赤血球に変化すると考えます。

このことも、千島博士の綿密な実験によって、次のような関係が成り立つことを発見しました。

健康で、栄養のよいとき…

赤血球↓すべての体細胞や生殖細胞に分化…赤血球の分化

断食、節食、大量の失血後、または病気の時

全ての体細胞や生殖細胞↓赤血球…赤血球への逆分化

また、千島博士は、**輸血の危険性**に警鐘を鳴らし、代替血液の使用を勧めていません。

大量の失血後でも、溶血反応、事後の感染症などの、危険の高い輸血に頼らず、代替血液（リンゲル液、食塩水など）を使用することで、十分対応できるのです。この第二原理はこのことの、裏付けとなるのです。

とりあえず、代替血液の補充で、失血後の血液の容積を補充し、血圧の低下等を防げば、赤血球の逆分化現象で、赤血球がどんどん増えてくるからです。

日本では「エホバの証人」の事件があり、その頑な、輸血の拒否の姿勢を、マスコミは大騒ぎをして伝えていましたが、他の宗教集団にも、そのような戒律を持つところもかなり、あるそうです。

ニューヨークの聖パルナ病院の外科で、全くの輸血無しで、リンゲル氏液を使用して心臓切開手術を成功させた、多くの症例が報告されています。

報告の中でベアリー博士たちは、「出血による赤血球の激減や、ヘモグロビン濃

度の著しい低下も生命を脅かすものではなく、また生命の永続的な障害をもたらすものではない。代用液の方が血漿や血液そのものの輸血より実際に有効である」と述べています。

また、A・J・シャドマン博士は「私は二万例以上の外科手術を行ってきたが輸血をしたことは一度もない。普通の食塩水を多く飲ませただけである。

その方が安全である、どんな症例にもこれを使ってきたが、死亡例は一例もない」と報告しています。

事実、交通事故で大失血をした患者が、輸血の血液が間に合わず、リンゲル氏液を使用したところ、一時はろう人形のように蒼白だった体に、みるみる赤みがさしてきて、窮地を脱したという報告があります。

第3原理 …… バクテリア・ウイルスの自然発生説（バクテリア・ウイルスは

一定条件下で自然発生する）

パスツール以来、現代医学においては、バクテリアやウイルスが親となる細菌類、親となるウイルス無しに、自然発生することはないとされています。

これに対し千島学説では、環境条件によっては、親となる細菌類、親ウイルスがなくても、バクテリアやウイルスが自然発生すると考えていますし、細菌、バクテリアについては、千島博士自身が顕微鏡で確認しています。

このほかにも、血液中に免疫を司る、不死なる知的生命体・ソマチッド (DNAの前駆物質といわれる) とするものが存在し、生体をコントロールしている、と言う研究で有名な、牛山篤夫博士も、細菌の自然発生を、追試確認しています。

***フランスの生物学者、ガストン・ネサンは画期的な分解能力を持つ、特殊な光学顕微鏡を開発した。

其の顕微鏡によって、我々の血液中には、細胞よりはるかに小さな生きた有機体を発見し、「ソマチッド」と名付けた。これはDNAの前駆物質ではないかと言われているが、地球上の

全生命の基礎単位ではないかと考えられている。

ソマチッドは、本人の体質の状況に応じて、特有のライフサイクルを持ち、その形状の観察をすることにより、ガンなどの発症を、18か月前に、予測することができる、というものである。

また、ネサンが開発した免疫強化製剤「コナーX」のリンパ注射によって、ガン患者1000人のうち750人が完治し、エイズ、筋委縮性の難病患者も劇的な改善をしているという。

このような情報に接すると、日本人の大多数は「そんなにいい薬があるのなら、なぜマスコミが取り上げたり、大病院で使われていないのだ」と言うが、まことに幼稚な意見だと言わざるを得ない。

千島学説に対する、日本の学会やマスコミの反応を見てもよく分かるが、正しいものが素直に受け入れられるわけではない、歴史上の偉人たち、コペルニクス、ガリレオ、ダーウィン、メンドル、ジェンナー等の当時の権威からの受難を知れば当然である。

もっと人間臭い、損得、既存説で生活している権威の体面、政治力等々などが本当の原因かもしれない、あるいはよくいわれる、世の流れとでもいう現象だろうか。

ガストン・ネサンは生涯の大半を常識的な反応、権威や製薬会社などの利害関係団体からの、感情的な攻撃の集中砲火を浴びせられた。

ついに故国フランスを追われ、カナダへ移住するが、ここでもカナダの医師会から訴えられ、有名な法廷闘争に発展することになる。

結局、彼の治療で助かった患者たちの多くの証言で、劇的な無罪の判決を勝ち取るのですが、これらのことは、また何時か書いてみたいと思っておりますが、紙面の都合で今回はこれでやめておきます。

*ガストン・ネサンのソマチッド新生物学 「完全なる治癒」 クリストファー・バード 上

野圭一 監訳 小谷まさ代 訳

また、フランスの外科医レリーは、「自律神経過剰刺激病理説」、いわゆるレリー現象を提唱しました。

肺・消化器などに分布している自立神経を、物理的、化学的に過剰に刺激するこ

とによって、その神経に支配されている臓器に、病変を起こすという実験です。

病原菌を一切入れずに、従って親となる菌がない状態で、肺に結核、腸には腸チフス、赤痢の病変を発症させたのです。

以上のことから、細菌やウイルスに感染しなくても、精神的ストレスや、添加物の多い食事・公害等により体内環境が悪化すると、これらの感染症または、それと同様の病変を発症することが、実証されたのです。

このことは、千島学説の「細菌、ウイルスの自然発生説」に支持を与えるもので、ウイルスは病気の原因であるよりは、むしろその結果であるという説を裏付けるものといえるでしょう。

第4原理・・・細胞新生説・細胞は細胞分裂ではなく、細胞構造を持たない有

機物から新たに生ずる。

1859年、ドイツの有名な病理学者ウイルヒョウが著書の「細胞病理学」の中で、「細胞は細胞分裂によつて生ずる」と発表して以来、細胞の増殖・新生は細胞分裂によつてのみ行われる、と考えられています。

しかし千島博士は、細胞分裂も、極僅かにあることは認めながらも、細胞の増殖は、細胞構造を持たない有機物から、発生するとしています。

そしてこのことを、膨大な顕微鏡観察により確認しました。

例えば、幾つかの細菌が寄り集まると、AFD現象によつてアメーバやゾウリムシ等の原性動物が生まれます。

また、幾つかの赤血球が集まると、AFD現象によって各種体細胞に分化します。更には癌細胞もまた、生体外に出して、強い光を照射したり、人工溶液に浮かべたり等、生体内とは明らかに異なる環境ではない状態（つまり生体内に近い状態）においては、細胞分裂ではなく、赤血球が分化し発生・増殖していきます。

第5原理・・・第一次の、または普通の造血…腸造血説（赤血球は、骨髓で造られるのではなく、小腸の絨毛で造られる）

現代医学では、赤血球は骨髓で造られると考えられていますが、千島学説では腸の絨毛で造られると考えます。

通説の、主に手足の長骨の骨髓で造られると言うのは、間違っていると主張します。

骨髓は、通常脂肪で満たされ、その中にある、造血幹細胞なるもので、造血されるとされていますが、造血幹細胞なるものは、誰も見たこともありませんし、造血幹細胞の存在そのものが、疑わしいと言わざるを得ません。

現代医学でも、「幻の造血幹細胞」などと揶揄されたりしています。

骨髓造血説に関し、9日ほど絶食した鳩の骨髓で、脂肪で満たされた部分に、赤血球が存在したという実験結果がありますが、其れはむしろ飢餓状態で、千島学説の第2原理「組織の可逆的分化が働き、骨髓の脂肪が赤血球に逆分化している姿を、造血と見誤ったものとみられます。

口から摂取した食物が消化管を通じて消化され、小腸で食物が、無構造な有機物の塊（モノラと呼ぶ）を形成し、絨毛部に付着して赤血球に変わり、体内（毛細血管）に取り込まれます。

これは、東洋医学における造血の考え方と合致します。

このほかに、第二次造血として逆分化による造血として、骨髄にとどまらず、全ての体細胞からと修正したうえで、第二次造血は、「赤血球の逆分化の現象」による造血である、という風にとらえています。

第6原理・・・ 遺伝学の盲点（遺伝は環境を重視し、後天的獲得資質は遺伝す

るとし。生殖細胞もまた、他の一般細胞と同じように、赤血球から生ずるとします。所謂、赤血球一元論）

生物が生きてゆく環境によって獲得した形質は、子孫に遺伝する。

「氏より育ち」を重視します。

千島博士は、遺伝的性質（体質・気質）は、遺伝子よりも、胎内及び生後の環境（生活習慣）から、より大きな影響を受けると述べています。

メンデル、モルガンの遺伝学においては、このような考え方は否定され、親から

受け継いだ、細胞核の染色体の遺伝子が体質・気質を大きく決定する、と言われてきました。

しかし、スターリン時代のソ連のルイセンコ、ミチューリンの獲得形質遺伝説は、農作物の品種改良に貢献し、食料増産に大きく寄与することによって、一世を風靡しました。

その後、共産主義の政治宣伝に利用され、学会では過去の学説として、顧みられなくなっています。

しかし、長寿遺伝子の研究などの最新の遺伝子学では、生後の生活環境（習慣）の方がより体質（健康）に影響すると、千島学説に合致する見解を述べています。

また、現代の遺伝学では、生殖細胞は体細胞と無関係とされていますが、千島学説では、赤血球からAFD現象により、一般の体細胞と同じく、生殖細胞も生成

されると考えます。

従って、健康な生殖細胞が生成されるには、母体及び父体の血液が、健康であることが不可欠なのです。

マスコミを賑わした、クローン羊は、核の無い卵子と乳腺細胞の核の合体で新しい個体が生まれており、生殖細胞ではなく、普通の体細胞の核からも、個体が生まれると言うことを実証しています。

第7原理 ・ ・ ・ 進化論の盲点 (進化の最重要な要因は共生である)

生物の進化は、時々々の環境に最もよく適合した、強い生物が生き残ったのではなく、同種の生物同士の助け合いや、異なった生物間の助け合い、共生現象とも言うべきものが、重要な鍵を握っていたと考えます。

ダーウインが「種の起源」を発表して以来、進化の主要な要因は、「自然淘汰・生存競争（弱肉強食）」が一般論となりました。

つまり、食物や生物をめぐる、競争に勝った個体が、子孫を残し繁栄し、敗者は淘汰されて滅びると言うものです。

この様な点を重視しますと、自然淘汰されて絶滅するはずのバクテリア、ウィルスなどの、多くの下等生物が現代でも、多数存在していることの、説明が難しくなります。

これに対し千島博士は、「生物進化の主要な要因は共生」であると唱えました。

例えば細菌は、寄り集まって溶け合い、進化発展しバクテリアとなります。

同様にバクテリアが寄り集まって、ゾーリムシやアメーバに、発展していきます（AFD現象）。

人間同士であれば、「愛」といったような力こそが、生物の進化の原動力ではないか、と言っているのです。

事実、私たち人間自身も、最も下等な生物である、腸内細菌と共存しながら進化してきたのです。

第8原理 ・ ・ ・ 心身一如の生命弁証法（生命現象を正しく観察するための科学

方法論）

千島喜久男博士は著書の中で、科学者にとって、哲学の重要性を説いています。

今日、科学を離れて哲学が成り立たないのと同様、正しい哲学なしでは、科学の

正しい発展はありません。

そして、哲学と科学の、ものの見方を統一した学の立場、即ち「**哲科学**」を提唱しています。

科学的事実と、正しい哲学理論の一致したものが、真実と言うことになると思います。

千島博士が指摘されるように、現代の科学者は、その哲学的視点が完全に欠如しています。

特に医学において、その程度が顕著に見られ、臨床医学の現場では、多くの弊害が露呈されています。

単純に病巣を切り取ったり、機械の部品交換のように、臓器の移植が行われます。また不足したものは、単純に補充するという、輸血の危険性にも言及しています。この様な現状から千島博士は、医学における哲学的見解を、心身一如の生命弁証法と名づけ、以下の十項目に要約して表しました。

1 万物流転

季節に四季があるように、万物は常に変化し、繰り返します。

生命もまた常に同じ状態にあらず、連続的に、そして螺旋的に、変化を繰り返してゆきます。

2 広く長い目で物事を見ること

従って、生命現象を観察するときは、広く永い目で捉えていかななくてはなりません。

ん。

例えば、赤血球から白血球に分化する際、赤血球でも白血球でもない中間型が存在します。

それを時間をかけて観察すれば、その現象を正しく認識することが出来ます。

しかし、短絡的にある局面だけを見た場合には、その中間型を異常赤血球や、白血球が赤血球を貪食している姿と捉えるかもしれません。

平原を見て「地球が平面である」と見誤らないように、生命現象を観察する際は、大局的に時間をかけ生命の連続性を考慮し、見ていく必要があります。

3 矛盾対立とその統一

東洋の陰陽のように、物事には矛盾や対立を孕んでおり、その葛藤を乗り越えて、進歩や変化がもたらされると言う考え方。

4 限界領域の重要性（連続性、排中律の否定）

科学では曖昧さを嫌い、すぐに黑白の決着をつけたがりますが、現実の生きている生物の世界では、曖昧な領域が多くあります。

AでもないBでもない、中間の状態を「排中律」と言いますが、自然界の現象は、はっきり区別できない限界領域の連続が多くあり、このことを見つけ出すことが大事になります。

5 可逆性の原理

自然現象の多くは一方方向だけではなく、逆方向への可逆性、繰り返し、リズム、

周期性などが見て取れます。

仏教の輪廻思想にも相通するものです。

6 量から質への転換

物理学的法則に当てはまらないことの多い、自然界の現象では、多数の下等生物が集まり、ある時点から、質的に変化した生物が誕生したりすることがあります。

7 AFD現象：成長、発育の法則

千島博士の造語です。生物は細胞の新生に始まり、複数の細胞が集合して融合して各種の組織を作り、それらが融合して器官を造ります。

この様な器官が集合して生物個体を形成します。

この様な個体は新しい機能や形態を獲得し、全体は部分より優位となり、分化発展した生命体となります。

A:Aggregation 集合

F:Fusion 融合

D:Differentiation 分化発展

8 共生、相互扶助、共存共栄

生物の進化の契機は、生物がお互いに利益を与えながら、共同で生活する共生にあります。

弱肉強食の生存競争による自然淘汰ではありません。

この意味では生命の本質は「愛」と言うこともでき、全ての宗教の教義と、自然界の本質とが合致するといえるでしょう。

9 心身一如の生命弁証法

心と体、即ち物質と精神は別々の存在ではなく、一如、一つのものである。

弁証法とは、哲学上の概念で、テーゼ（一つの立場、命題）と、アンチテーゼ（反対する立場）がアウフヘーベン（止揚）されて、新しい境地に発展するという、ヘーゲル哲学の立場ですが、東洋思想の陰陽の対立が新しい境地に至ることと、似た意味でとらえられます。

10 調和と波動螺旋性

物質や生命を含むこの宇宙の全ては、少しゆがみを持った調和を保ちながら、周期的に螺旋を描いて発展すると言います。

これは、DNAが二重螺旋構造をしているのと興味深い一致を示していますし、仏教の輪廻思想にも相通じるものがあります。

3 千島学説の健康への適応

氣、血の調和が、東洋医学の根本思想であることは、よく知られたことですが、千島博士は、私たちが健康でいるためには「氣（精神）・血（血液及び肉体）・動（運動）の調和」が必要であるとして、現代人には特に運動の重要性を認め、氣血動の調和を説かれました。

それには全ての環境との調和、特に「人と人との和」、「大自然と人との調和」があつて、はじめて実現されると唱えました。

1 氣血動の調和

千島博士は、氏の学説及び、古来よりの東洋医学的観点より、氣血動が調和していることが、私たちが健康であるための、必須条件であると述べています。

そしてそれは、どれか一つが突出して良好であればよいと言うのではなく、氣・血・動のいずれもが、良い状態に調和していることが大切なのです。

（千島博士は、その中でも「氣」が一番重要と話されています）

1) 氣(精神)

「氣」は、触ることも見ることも出来ない存在ですが、私たちは、「天氣」、「氣質」、「氣力」、「勇氣」と言う風に、身近なものとして古来より感じて来ました。

東洋医学では、私たちの体には氣が巡り、氣の盛衰・偏りにより病氣が起ころと考えます。

病氣とは、読んで字のごとく、「氣が病む」ことを言います。

西洋医でも、新潟大学の安保教授は、所謂「病は氣から」を、白血球の自律神経支配のメカニズム、を通じて明らかにされました。

つまり、(解剖学的には認められませんが)、体内を巡る「氣」が病むことによ

って、病気を発症するのです。

では、気を病むとはどのような状態を言うのでしょうか。

それは、過度のストレスや、精神の失調等により、気の盛衰・偏りが起こり、体調を崩すことを言います。

ストレスが、多くの病気の原因になっていることは、周知のことです。

過度のストレスが生じると、交換神経が過緊張を起して、血管が収縮し、血液循環が悪くなります。

気は、自然現象として、天気、気候、熱気、寒気、香氣、臭気、空気が、電気、磁気、陰陽の二気等々として現れます。

呼吸と生命…息をすることは生きることである。

精神、心の状態…元氣、勇氣、氣質、氣性、意氣、氣力、氣魄、氣分、正氣、氣を病む、氣を落とす、等々

氣又は神、靈、魂、心靈、活力、惡靈、物の怪、幽霊等々

氣にまつわる言葉の数々ですが、いかり、恐怖、悩みなど心の不安定を避け、自律神経の調和を乱さないことが大事です。

鍛錬、修練により、また信仰を持つことで強い信念を持つこと。

樂天的に、日々感謝の生活を送る。

等々に現れてきます。

ストレスが高じると、活性酸素を産出するホルモンも増え、血球を含めた細胞傷害が起こります。

つまり、過度のストレスにより、血液循環の障害及び、血の性状変化（破壊）が起こるのであります。

私たちの免疫力が最も活性化するのは、脳波がシータからアルファー状態にある時と、言われています。

私たちがリラックスしている時、瞑想している時、何かに夢中になっている時、感動している時の脳波は、まさしくこの状態にあります。

宗教家、絵描きなどの芸術家で長命な人が多いのは、もつともなこともしれません。

また、セラピストの手から放射される生体磁気も、多くはシータからアルファーの周波数を呈しています。

ある公立病院で勤務していた医師は、「現代医学では手の打ちようがない」と宣告され、いわゆる医者から見放されながらも、奇跡的に治癒に向かった、末期癌患者に共通していることがあります。

それは、「これまでの誤った生き方に気付き、癌とともに生きよう、誤りに気付かせてくれた癌に感謝しよう」と、心の転換（変革）が出来たことである、と述べています。

中でも気と感情、を安らかに保つことが、一番の免疫の向上をもたらします。

末期の腎臓癌から生還した寺山心一翁氏も、その著書「がんが消えた」の中で、

同様なことを述べています。

以上のことから、精神状態の安寧、即ち「氣」を良好な状態に保つことが健康（回復）にいかん重要であるかが理解されるでしょう。

2) 血（血液及び肉体、食物）

赤血球は体のすべての細胞の母体であり、その赤血球は、腸で食物消化産物（食物モネラ）から作られる。

細胞の新生によって生じた腸の絨毛の上皮細胞から、赤血球は作られるというのが、千島学説の第五原理でした。

古今、東西の文献などにもあるように、血統、血筋、血縁等の言葉は、血が親から子への、遺伝質の担い手であるという直感が、正しいことを示しています。

また血液は、精神状態、食物の質や量、運動などによって、その状態に大きな影響を受けることも知られています。

清浄な血液を作るには、まず第一に、正しい食生活が欠かせません。

曰く、菜食、小食、咀嚼である。

腸内共生菌を増殖させる食事…発酵食品、腸内のバクテリアとの共生が重要。

血液の状態は、精神状態、運動とも密接な関係があることをよく認識すること。

次に注意すべき諸点を列記すると…

アシドーシス（酸血症）

野菜、カルシウム不足で、砂糖や動物性食品を多食すると、血が酸性に傾き、

ガン、糖尿等の成人病の原因になる。

PHが7・4が理想、7・15より酸性に傾くと生命の危険もありうる。

栄養の取りすぎ…肥満、高血圧、動脈硬化の原因になる。

古来より人類は、飢餓に対しては耐性があるが、食物の取りすぎに対しては、極めて防御が弱い。

いかに食べないか？が現代の文明社会の課題ではないだろうか？

薬の取りすぎ…サリドマイド、スモン病、ワクチン、ストマイツンボ、ペニシリンシヨック、輸血による容血反応及び血清肝炎、医療ミス、薬の副作用等々。

日本人は、何でも薬に頼るが、基本的には全ての薬は一種の毒である、との認識

が大事である。

犬など動物を飼ったことがある人はよく分かるでしょうが、彼らは具合が悪い時などは、決して何も食べません。

食を断つことによつて、患部の細胞が逆分化して赤血球になり、更に白血球になり（白血球はとりもおささず免疫細胞です）はより治癒が早まることを、本能的に知っているのです。

農薬、化学薬品、添加物…
有機塩素剤、水銀剤、砒素、鉛剤等々は、神経系、呼吸器、心臓、肺、肝、等々
殆どの臓器に危険である。

人工着色、有害添加物で偽装された食品が氾濫しているが、一説によると日本人
一人当たり、年間4kg以上の添加物を食していると言われています。
更に農薬も5kg前後食しているという報告があります。

合計して9kgというと、ボーリングのボール二つ分の重さになります。
年間とはいえ、これだけの有害物質を体に入れているのだと思うと、気持ちが悪
くなりますね。

大気汚染、水質汚染、騒音、臭気、放射能、等々私たちのまわりは、数々の危険
と隣り合わせて営まれていると言っても、過言ではありません。

3) 動(運動)

運動の精神的効果として、心身を爽快な気分させることです。

ストレス解消に役立ち、不平不満や緊張を緩和し、自律神経の調和を保つ効果があります。

運動の肉体的効果として、血液が良く循環することによる、血液の浄化がありません。

運動は、単に筋肉、骨の鍛錬だけでなく、脳、神経、内臓の機能、皮膚の鍛錬にも有効です。

作業療法という療法がありますが、慢性病、結核、ノイローゼなどの患者に、適当な作業を行わせることにより、

病気に集中していた気持ちを発散させ、愉快な気分になせ、呼吸の作用も深めることよって、心臓の働きも活発になり、血液の循環にも効果があり、著しい治療効果があつたということです。

上記のように、自然と調和した、気血動の調和した生活が大事なのですが、今日のように、自然が大きく破壊され、大気も水も土も汚染され、そこで生産された食物も多くの有害物質を含んでいるような状態では、健全な生活を営むのが、困難になってきています。

この危機を回避するには、第一には、西洋思想の唯物的考え、経済優先の思想を、猛省し、東洋の精神文明を復活させることです。

そして、人間性と、人間の生命と健康を、すべてに優先させる価値観に、転換を図るべきであることを、千島博士は主張します。

そして第二には、生命や自然についての正しい知恵を学び、それを普及徹底することです。

釈迦は、二千年以上も前に「人間に共通な病は無知である。知恵こそ全ての病を救う唯一のものである」と、

また、フランスの生命の哲学者ベルグソンは、「人間の知識の特徴は、生命についての無知である」と言っています。

千島博士の言う、正しい知識とは、博士が説かれた、八つの原理を正しく理解、実践し、その普及に努めることではないでしょうか。

そのことにより、現代世界が直面している、危機を克服することができる知恵が湧きあがり、科学、芸術、宗教、哲学の一体化、産業や医療も異なった視点で、見直されてくるでしょう。

近代は西洋科学技術文明に全面的に制覇されてきましたが、これからは、東西文明の融和による、第三の文明を築き上げて行くべきである。

この道は困難な道ではありませんが、東洋人、特に日本人がそれを達成すべく、天命を負っているのではないかと、千島博士は訴えます。

特に、医療においては、東洋古来の「氣」を哲科学的に究明することが、急務ではないでしょうか。

最期に、極めて優秀な生物学者でもあらせられた、昭和天皇は1957年4月、岐阜に行幸されました。

その折、岐阜大学教授だった千島博士は「トノサマガエルの生きた赤血球の出芽現象」の顕微鏡写真を天覧に供しました。

更に、著作である「新生物学の基礎（遺伝・発生・進化と生殖細胞の期限）」

（明文堂、東京）8冊と「骨髓造血説の再検討（血球の可逆的分化説）」（医

学書院) 8冊を献上し、奉納あらせられました。

微量ミネラルについて

私は、千島学会の会員であり、断食も一カ月の水だけ断食、2週間、1週間の断食は何度か経験していますので、断食の間に、多くの難病の方が、見違えるほど元気になって、退寮してゆくのを何度も見えています。

当時は千島学説とは無縁の世界にりましたが、今思い返してみますと、千島博士の学説が、まさに当を得たものだと実感することができます。

断食というのは、一般の人が想像をするほど、苦痛なものではありません。

難病で苦しんでいらっしやる方は、一度は経験されることを、お勧めいたします。

不幸にして（ガンから生還された人たちからは、ガンを体験したことによって、かえって深い人生体験をしたと、不幸だったと、思っていない方も多いのです）、がんと診断されてしまった方は、くれぐれも、現代医療のベルトコンベアで、手

術、抗がん剤治療、放射線治療で、治療に専念なさらないように。

このように、現代医療で直すことができないガンに対して、非常に多くの代替医療が開発されています。

まず私がガンになったらどうでしょう、現在71歳、中肉中背、少々メタボきみですが、異常を特に感じなければ、そのままにしておきます。

異常を感じた場合、生活上、不便を感じるような場合は、一応それなりの現状認識のために、検査をやり、どのような状態なのかは知りたいと思うでしょう。

そしてまず第一にやるのは、食養生でしょう。

玄米菜食、腹6分に徹します。状況が許せば断食をやるでしょう。

そして、その上で、超ミネラル水という液体を、大量に飲みます。

癌の場合はなぜ大量摂取が必要かは、末期癌からの生還の体験記にもありますし、多くの癌患者を救った、野島博士の著作にも明記されています。

私は、10年来、この水を飲んでいますが（朝晩100ccづつ）、今年で発病以来30年になる糖尿病は、ヘモグロビンA1C6%以下です。

10年来、超ミネラル水を飲み続けているので、まず、がんの発病はほとんど心配ないとは思いますが、かなりストレスのかかる、中小企業の経営者です。

そして、かなりの不摂生をしますし、酒も毎晩飲みます。

大きなストレスでもあれば、ガン発症もゼロとは言えないでしょう。

しかし私には、微量ミネラルの力に対する確信があります。

この水と10年以上前に出会い、その普及研究に努めてまいりました。

当時の私は、社員15人ほどの小さな貿易会社を経営しておりました。

奇跡のような水があるが、ビジネスとして興味がないかと、ある友人から紹介を受けたのです。

商売をしておりますと、いろいろな儲け話と称するものがやってきましたが、この水は知れば知るほど、すごい効用のあることが、わかってきました。

そして、この微量ミネラルの医療への応用の先駆者として、普及に努めていたのが、野島久尚医学博士だったのです。

博士は、二十年以上前、千葉県松戸市の保健所の所長でした。

同僚が、ストープのお湯で大やけどを負ったとき、とりあえず、微量ミネラルの営業マンが持ってきていた、火傷にも踏功があるという、この超ミネラル水を、患部にべったりと塗ったのです。

翌日、同僚のやけどは、ほとんど問題の無いほどに、治っていたのです。

このことから、野島博士はこのミネラル水の研究に没頭し、外用にこれだけ効くのなら、内服しても効果はないものかと、自らを実験台にして数々の実験を行い、周辺の市会議員で、医者から見放された末期胃がんの議員に、「良かったら、試してみるかい」、と声をかけたのです。

そして、医者から見放された、このガン患者が、半年もしないでゴルフができる

ようにまで、快復したのです。

多くの、超ミネラル水の効果に驚き、私はこのビジネスに、賭けるようになってきました。

何十人といった野島博士のこのミネラル水の販促部隊で断トツの成績を残し、博士の説を普及すべく、横浜の各地の講演会に引っ張り出し、いつの間にか、このビジネスは商売以上のものになってきました。

そんな矢先に野島氏とは些細なことで、関係がこじれて、私は別の道を行くことになりました。

野島博士は微量ミネラルの普及を焦るあまり、所謂マルチ商法の連中に乗せられては途中でもめて、訴訟を繰り返すということで、悪い評判がたつてしまったことがありました。

折角の商材の価値が、すっかり減殺されてしまった時期があったのです。

私は、このビジネスで頑張ってくれている何名かの販売員、代理店諸君の生計を考え、思いきって、微量ミネラル水のメーカーである、三根健二朗会長にOEMで、我々の「サンミネラル100」の製造を引き受けていただきました。

どういうわけか、三根健二朗会長とは実にくまが合い、私の正当性を認めてくれて、その後、私はNPO法人を設立し、商売とは別にこの超ミネラル水を普及していくことになるのです。

この会長は、年配の方ならよくご存じの、往年の名歌手で歌謡界のボスであった、ディックミネの次男坊だったので。

彼も、20数年ほど前に、末期の大腸がんを患い、腹部のすべてのリンパ節を切除され、抗がん剤治療のあまりの苦痛に、抗がん剤をすべてどぶに捨て、このミネラル水だけで、現在78歳でまだピンピンしています。

いわば、微量ミネラル水で末期がんを克服した、正真正銘の人体実験第一号であ

ったわけです。

そんな経緯もあって、三根健二郎氏は、私財を投げうってこの微量ミネラルの製造開発に携わり、現在ではこの業界の第一人者として活躍されています。

彼は、お父上の影響もあって、芸能界に顔が広く、アツというような人たちが、彼の超ミネラル水の恩恵を受けているのです。

ミネラルは原則として水に解けません、ですから、特殊な花崗岩を濃硫酸で溶解し、ミネラルを強制融解させます。

アメリカ、ヨーロッパ諸国等では、植物が自身の根から吸い上げるミネラルを、使用した療法がさかんです。

これはこれで、大変結構なことですが、残念ながらガンのような、重篤な病気の場合は圧倒的に、微量のミネラル量が不足します。

植物も生き物ですので、自身の生存に必要なものを、蓄積することは無いからです

朝鮮ニンジンなども、其の薬効は広く認められていますが、それはミネラル、特に微量ミネラルの豊富さによるものです。

それならば、なぜこの微量ミネラルは癌治療に著効を示すと言われるのでしょうか？

前にもお話ししましたが、我々の体には、毎日のように、数千から数万のガン脂肪が発生しています、それも40歳くらいからは、どんどん増えていきます。

ところがそのがんは、若いころは自然治癒力、具体的には、NK細胞というキラー細胞によって、日々撲滅されているのです。

しかし年とともに、キラー細胞は減少し、代わりに、ストレス、老化、食生活の乱れの蓄積などで、年とともに自然治癒力は減少していきます。

微量のミネラルを大量に含んだ水を、超ミネラル水と呼んでいるわけですが、実は細胞が発生するときに、DNAに書き込まれた通りに、正常の細胞を作ろうとしますが、その時に、酵素というものが非常に大きな仕事をしなければなりません。

ん。

この酵素の核になるのは、実は微量のミネラルなのです。

酵素の核になるばかりでなく、これらの微量のミネラルが周囲に多数存在することで、多くの酵素が生き生きと働くことができるのです。

そしてこの触媒となる酵素が、一秒に数万回という微振動を、ピチピチと繰り返すことで、細胞の新生が活発に進んでゆくといいます。

以上は、酵素を通じて細胞活性を高める作用ですが、毒物を体外に排出するキレート反応、そして神経情報の伝達機能についても、微量ミネラルは深くかかわっています。

これらについてももう少し詳しくお話しますと、酵素とは、生体内で起こる様々な化学反応を促進させる物質（触媒物質）です。

一生の間に体内で生産される酵素の量には限りがあり、それが尽きるときが生命活動の終わりを意味します。

従ってなるべく、酵素を節約して生きることが、長生きの秘訣になるわけです。

人間の体には、60兆の細胞があると言われていますが、その細胞一つ一つの中に、5000種類とも言われる酵素が機能していて、代謝酵素、消化酵素、食物酵素、アルコール分解酵素などがあります。

酵素は過熱に弱いという性質がありますので、生の食品や発酵食品をを摂取することで、体内の食物酵素を節約することができます。発酵食品が体に良いと言われる理由です。

これらの酵素が十分に働いたためには、微量ミネラルの摂取が不可欠なのです。

酵素には周りに酵素を必要とするものと、既にミネラルを内蔵している（金属酵素）ものがあります。

この金属酵素の中で最も知られているのが、SOD (superoxide dismutase) といわれる抗酸化酵素で、体内で過剰に発生してしまった活性酸素の毒を消してくれます。

活性酸素は、侵入した細菌などを攻撃するには、頼もしい味方ですが、やや凶暴な性質があり、正常な細胞まで傷つけてしまうことがあります。

このため、老化や、生活習慣病の原因として、嫌われています。

活性酸素は、ストレス、紫外線など通常の生活の中でも簡単に発生してしまいますので、そのすべてを排除することは、不可能ですが、十分な微量ミネラルを摂取することでSODが活性化され、その毒性から身を守ることができるのです。

また、キレートとは、ギリシャ語で「カニのはさみ」という意味です。

とらえた物質をハサミのように包み込み、結合する作用を「キレート反応」と言い、ミネラルが毒性物質と結び付き、無害化して体外に排出させます。

このキレート反応のおかげで、私たちが毎日食べている、農薬、食品添加物、化学調味料など（合わせると年間に9kg近いものを摂取しているといえます）から身を守られているのです。

従って、ミネラルの欠乏は、実に恐ろしい結果を招きます。

今一つ、ミネラルと神経情報伝達機能の活性化について、考えてみましょう。

体内の細胞は全て球体で出来ていますので、球体と球体との間に必ず隙間ができます。

その隙間をミネラル固有の電子的な活動でつなぎとめ、細胞同士の電子活動を活発にし、神経情報伝達機能も活性化させます。

たとえば、カルシウムですが、単に骨成分のためにあるだけでなく、神経の働きには不可欠です。

カルシウムが不足しますと細胞内の貯蔵庫からカルシウムを持ち出して補充

するのですが、その情報が脳へ伝達されると、精神的な異常興奮が起こります。カルシウム不足がイライラの原因であるというのは、このことが原因なのです。この微量のミネラルはあまりにも小さすぎて、其の医学的役割は解明されていない、というのが正直なところですが、この細胞を生み出すとき触媒となる酵素の働きに多大な影響を及ぼすというのは、野島博士の論文の中で、述べられています。

医学の世界よりも遺伝子物理学、量子力学の世界の問題でしょうか、
* 「『驚異の水』 ロックウォーター」

シーマロックスの製法・物性・用途のすべて

ウォーターデザイン研究会 久保田 昌治 編 技術出版

118ページより野島博士

更に一つ、我々の超ミネラル水は、濃硫酸で特殊な花崗岩を溶解しますので、**硫酸**の宝庫でもあります。

硫酸基は昆布や海藻類に含まれているヌルヌル、いわゆるフコイダンです。

最近はこのフコイダンを使った代替医療が、あちこちで効果をあげていると評判になっていきます。

これについては我々も希望的な観測を持っていますが、いまだ仮定の域を出していません。

研究の文献が少なく、はっきりしたことは言えないが、よい効果が報告されているということでは。

最期に、生涯に二度のノーベル賞を受賞した科学者であり医療研究者、ポーリング博士のことを紹介しておきます。

*** ポーリング博士の言葉 ***

すべての病気を追求すると、

全てがミネラルの欠乏に辿りつく。

ミネラルは単体では有効な働きができない。

人体の健康維持には、

調和のとれた多種類のミネラル摂取が極めて重要である。

博士は、アメリカの量子化学者、生化学者、分子生物学者、医療研究者といった多くの分野で優れた研究成果を上げ、1954年にノーベル化学賞、1962年にはノーベル平和賞を受賞しました。

現在でも、多くの分野で世界中の研究者が、博士の著書や論文を引用しています。特に注目されるのは、無機物（ミネラル）と生物の研究であり、これは地球上にいかにして生物が誕生したかという、生命の原点を探る研究です。

無機物しか存在しなかった地球で、いかにして有機物が発生する契機があったのか？

元素のうち、酸素、水素、窒素、炭素以外のすべての元素は無機物です。

世界で初めて、「生物と無生物の間の失われた環 (missing link)」を解明した先

駆者として有名です。

炭水化物、蛋白質、脂肪、ビタミン、ミネラルを五大栄養素と言いますが、ミネラル以外の四つの栄養素が、いかに豊富でもミネラルがなければ正常に働かないのです。

そう言った意味では、ミネラルこそ五大栄養素の中心的存在であると言えます。そしてミネラルは、体内では決して作り出すことはできませんので、体外から十分に補給してやらなければならないのです。

我々の微量ミネラルの誕生は、1977年、大阪大学の薬学部出身の、研究者、嶋西浅男氏によつて、「シーマロック」という商品名で開発され、特許を取得しました。

腐食花崗岩を原料に濃硫酸でミネラル成分を抽出し、原液は淡黄色の比重1・1

〔1・2 PHO・5〕1・0の強酸性の液体です。

当初は、産業用の用途を意図して、汚水処理、稲の生育、養魚用水などとして、汚水のスラッジの凝集作用、ミネラル成分による生化学作用、殺菌、脱臭、止血、耐病性向上、成長促進、強い創傷治癒力等々、興味深い効果や現象が見られました。

後に、この水の利用をを医療方面に展開する先駆者となった、野島尚武医学博士（当時は千葉県松戸の保険所の所長）は、技術出版社に「シーマロックスの医学的応用の背景と応用例」として下記のような「研究要旨」を寄せています。

微量ミネラル原液の使用により、医療の世界に革命が起こりそうである。内用あるいは外用において使用濃度に若干の検討を加える必要があるが、再現性を以て有効な薬理作用が殆どの疾患にて発現したのである。

人類の永遠の難問題と考えられていた癌に対しては、恐らくその種類を問うこと

無く、完全治療へのメドが立ちそうである。

アレルギー疾患、自己免疫疾患等の難病の解決も夢ではないように思える。

胃腸炎、化膿性疾患、火傷などの緊急対応の治療では微量ミネラル原液は、上皮から直接浸透して、非常の短時間に治癒させる即効性を有する一方、ガン、成人病、難病の治療では、それは腸管で容易に吸収され、病巣で奇跡的な治療効果を発現している。

シーマロックスの開発者である嶋西浅男氏の他に、かなりの人がそれを希釈し、個人的に飲用したり、皮膚損傷部位に外用していると説明されても、現代医学を学んだ小生にとって、実行するにはクリアしなければならぬ疑問が多々あった。

まずは、外用から

間違っても害がない、と考えられる薄い濃度にして外用から始めた。

原液ではとても素人には扱えない濃い硫酸抽出液であるばかりか、医療行為を行うにしても適度の濃度があると考えて、1000倍希釈、すなはち10000ppmの濃度から始めた。

皮膚、口腔粘膜、鼻粘膜、眼球結膜での刺激性の外用実験を行ったところ、100倍希釈という低濃度で始めたにもかかわらず、この濃度で皮膚の痒みに効果があり、アトピー性皮膚炎には、幼児で更に3、4倍薄い溶液でも効果がみられ、すでに実用レベルであることが窺われた。

原液の医療利用は勿論のこと、各種異なる濃度の水溶液の試み、使いかつての良いい乳化、軟膏製剤化等への応用が、非常に面白いと考えた。

原液の使用では強烈に沁みて痛くても、水虫を一発で治療できることを目のあたりになると、微量ミネラル原液の限らない能力を期待するようになった。

以上、「シーマロックスの医学的応用の背景と応用例」として下記のような「研究要旨」より抜粋

いずれにとつても、我々にとつては理論的な整合性よりも、現実にしたしかな効果があるのかどうかということが、問われるわけですが、それについては、私の親しい友人たちの、実際の闘病の実績を、紹介してみたいと思います。

微量ミネラルでの治療体験

一年ぐらい前からどうも、腹の調子がおかしかった。

何日も続く便秘、そのあと襲ってくる激しい下痢、、、。どうもおかしい、もしかしたら

頭の中に「がん」という言葉がよぎったが、必死でその思い打ち消していた。それだけは決して認めたくはなかったのだ。

そのころからミネラルのことは知っていて、超ミネラル水を友人から分けてもらって、あまり痛みのひどい時は、その水を大量に飲むと、しばらく痛みはとまっ

それでも彼は、病院へ行くのだけは抵抗があった、せめてここなら、ということ
で公立の検査機関に、検査に行くことにしたのだった。

ここなら、ある程度の技術レベルもあることだし、病院のようにそのまま、緊急
入院、即手術、抗がん剤、苦しみながらの死という、シナリオまでには、猶予が
あるはずだ。

そして運命の検査の日がやってきた。

少なくとも、30分はかかる内視鏡の検査は、10分もかからずに終わってしま
った。

内視鏡を肛門から入れてみたところ、S字結腸に大きな腫瘍があり、それ以上カ
メラを奥に入れることができなかったのだ。

「すぐに切らないと腸閉そくになって危険だから、優先的に手術をしてもらえ
るように、先生に電話してあげますよ」

医者がやさしく言った。

そのやさしさが、却って彼に結果の重大さを実感させた。

検査は軽く終わったものの、結果は重大なものだった、彼は重たい気分沈んだ。「やっぱり」という気持ちと、かすかにはあったが、わずかな期待が、もの無残にぶち壊された。

其の夜、悶々として過ごしていると、手渡されていた、病院への紹介状の内容が無性に知りたくなった。

「この人はもう駄目、手遅れ」あるいは、まだ多少の希望は残っているのか、知りたくなったのだ。

その結果を知ってから、最終の方法を、考えてみようと思ったのだった。

そこでスパイ映画もどきの方法で、開封の痕跡が残らないように、蒸気で封を開けてみようとしたのだが、なんと封筒の上に書いてあった文字が蒸気で滲んでしまったのだ、完全に開封したことがばれてしまう。

こうなったらと、やけを起こして、後はハサミで大胆に開封してみた。

とぐろを巻いた、彼の大腸の癌の写真数枚と、専門用語だらけのコメントがあった。

詳細は理解できなかったが、末期の癌であることだけは、はっきりとわかった。そして「早急の加療が必要」と書かれてあったのだ。

「さてどうするべきか」 普通なら選択肢などない、急いで病院に駆け込んで緊急手術をするのが当たり前のことである。

しかし彼の場合は もう一つの選択肢として残っていた開き直りの解決の方に次第に気持ち傾いていった。

「やっぱり切るしか無いのかなあと思いましたが、待てよ？とも思ったんです。」

というのも、彼の知り合いで腹を切って良くなったのは、一人もいませんでしたし、それに、癌はS字結腸だけに限らず、腸全体にまであるかもしれない、もし

手術で切り取るとしたら、腸全部を、ごっそり切ってしまうことになるのか、そう思ったら絶対に切りたくないと思ったんですよ。

そして、Nさんが開き直って選んだ奥の手は、微量ミネラルを大量に摂取することだった。

今までも、苦しかった時には、ミネラル水を摂取することで、何とか体をだまし続けてきていただけに、ここにきて微量ミネラルを大量に摂取して、免疫力を高めることにかけていたのである。

ということとで検査直後の十一月の初めから、Nさんはとにかく通常の5倍というミネラル水を、毎日摂取することにしたのである。

しかし十一月中はやはり2日3日と便秘が続く、ものすごい腹痛に襲われた。4〜5時間も続くその激痛が抜けたかと思うと、今度はひどい下痢になる。

そして下痢が治るとまた便秘、、、そんな繰り返しに苦しめられたのである。

そんなとき襲ったのは「とんでもない勘違いをシテイルのではないか？」という不安だった。

いったん腹は決めたものの、心のどこかにそんな思いがよぎるのを禁じ得なかった。

不安を鎮めるためにイメージ療法にも取り組んだ、努めて明るく考えることにも努めた。

おやつ？と思ったのは12月に入ってからだ。

次第に通じが良くなってきて、「一日に2、3回、中指くらいの太さの便が出るようになったんですよ。」

以前の便はうどんくらいに細く、キシメンみたいにねじ切れていたんですが、それがどんどん太い便になってきた。

ですから、急激に快復してきていることが実感としてわかりました。

そして12月の10日くらいには「もう山は越えたな」という実感があつた。

12月に入ってからは「おや、なんか調子がいいぞ」と希望が持てるようになっていたのだが、やがてそれが確信に変わっていったのだ。

便の状態がどんどん良くなっていくのと同時に、さまざまの好転反応も出てきていたからである。

Nさんに会って話を聞いたのは「がん宣告から50日後」であつたが、その時のNさんの顔には自信と希望があふれていた。

Nさんは京都大学工学部の出身。専攻は電気で、大手の自動車メーカー、外資系のコンピューター会社と、渡り歩いたエリートで、オカルトや、いい加減な民間療法を信じ込むような、レベルの人間ではない。

また京大時代はボート部で鳴らし、東京オリンピックピックを目指したり、まさに文武の調和のとれた人物であつたが、世の中には、現代の科学なんかで理解できないこともあるんだな、つくづく思うようになったという。

＊雑誌「笑む」ミネラル特集より抜粋

最後に、超ミネラル水で末期癌から復帰した、ある男性のメールを紹介しておきましょう。

昨日、近所で野島先生の講演会があり、とても盛況でした。

相変わらず、ひょうひょうとした語り口で、衝撃的な癌治療の内容をさりげなく話されます。

私は講演を聞きながら、手を合わせていました。

もし、この先生がいらっしやらなかったら、私は他の選択肢無しに、腹を切らなければならなかったのだ、そして、私の友人知人と同じように、再発、転移に怯え、がっくりとやせ衰え数年以内に死んでいくという運命だったのだ、と。

自分は本当にラッキーだったと思いました。

今日、このML（超ミネラル水の頒布会のメーリングリスト）に投稿したのは、

これからこのビジネス（超ミネラル水の頒布会）に参加されようと思っていられしやる方に、ぜひとも聞いていただきたいことがあったからです。

それは、「このビジネスを、他のビジネスと同じように、単にお金という側面だけで考えて欲しくはない。」ということです。

このビジネスの本質は、微量ミネラルという、他とは比較出来ない商材の力です。どこに、たかだか月数万円ほどで、末期ガンが治っていく物があるでしょうか。それが、ガンを宣告された人間にとって、どれほどありがたいことかお分かりいただけますか。

私のように、最初から医者を当てにせず、微量ミネラルだけにかけてみようという人間は少ないと思いますが、ガンの手術をされた方は、皆一様に再発転移に怯えながら日々を暮らしているはずですよ。

そういう方が、日本には数百万人いるのです。その方々の一人でも多くの方に、この微量ミネラルを知っていただきたいのです。

そのために、あなたに、このビジネスに参加していただきたいのです。
お金は、このビジネスの場合は、必ず後からついてきます。
いやでも儲かるように出来ています。

だから、お金のことは当分忘れて、「人のお役に立つ。」という気持ちで参加してください。是非、あなたの力を貸してください。
ガンを宣告され、この微量ミネラルで生きる力を与えられた男の、切なる願いです。



第二章

ミネラル水普及研究会とは

微量ミネラルは、以前は、植物、野菜を摂取することによって土の中から自然に人体に取り入れることが出来ましたが。

しかし、近年特に先進国において、農薬や化学肥料の多用により、農産物に含まれる微量ミネラルは、従来の5分の一から数十分の一にまで減少してしまいました。

その結果、一昔前には考えられないような生活習慣病の蔓延も、一説ではこのミネラル不足に起因しているとも言われています。

すぐる、日露大戦時、百万の日本陸軍の将兵のうち二十数万人が罹患し、2万7千人以上の死者を出した脚気という病気がありました。

当時、陸軍軍医局長の森林太郎（小説家・森鷗外）は、ドイツのコッホ研究所でのエリート教育をうけた東大出身の医者として、脚気は絶対に細菌が原因であると盲信しておりました。

一方、海軍においては、ロンドンのセントカンタベリー病院医大を優秀な成績で卒業した、軍医の高木兼寛により、日英同盟に基づく英国海軍の協力もあり、より実証的な方法で、食べ物が原因であることの解明が進み、殆ど脚気が克服されていたのです。

*高木兼寛は東京慈恵会医科大学の創設者、「病気を診（み）ずして病人を診（み）よ」の言葉を残した。

また、無料でかかれる施療病院をつくり、患者の痛みのわかる医師と看護婦の養成を願って、医学校と、わが国初の看護学校をおこした。

にもかかわらず、陸軍では、その実験さえも拒み続け、さらに多くの死者を出し続けなんの省みるところありませんでした。

現在では、ビタミンB1の欠乏がもたらす病気であることが判明したわけですが、その当時の医学のレベルでは解決できない、難病であったわけです。

作家としての森鷗外の名声はさることながら、日本の高級官僚の一典型を見るような思いがします。

現在、国民の医療費は年間32兆円以上（2004年調べ、フランスやドイツの国家予算に匹敵するといえます）にも及びます。この金額はこのままで行けば増加しこそすれ、減少することはないでしょう。

又、厚生省の高級役人や、エリート医療ジャーナリスト、エリート医師たちは、日々難病に苦しみ、先の希望もなく、惨めに苦痛に満ちた死を迎える多くの患者に対して、あまりにも無力で、無慈悲であります。

本気に患者の苦しみに向かい合おうとしているのかどうか、己の立場や利益と、体面の保持が先行するばかりで、新しい医療の可能性に鈍感すぎるのではないのでしょうか？

我々はこの超ミネラル水による可能性を研究し、国富の基本である、国民への健

康寄与と国家の医療費、削減に貢献していきたいと考えています。

NPO法人（特定非営利活動法人）「超ミネラル水普及研究会」は、全国で普及活動をしてくださる代理店を求めています。

横浜市中区不老町2-8 不二ビル
電話…045 664 7747
FAX…045 664 7748
ホームページ：http://www.lmineral.com/



第三章

ミネラルとは

はるか昔の紀元前6世紀、古代ギリシャの植民地であったエーゲ海東部の都市国家ミレトスで、当時既に「物質の素になるもの」として「元素」という概念が生まれていました。

当時の元素の概念というのは現在とは少し違った概念でした。

現在、近代科学で考えられている「それ以上細かく分解できないもの」といった元素の概念を明確にしたのは、18世紀のフランスが生んだ天才科学者、ラボアジエでした。

このころ既に「実体」として幾つかのミネラル（炭素、イオウ、鉄、スズ、鉛、水銀、金、銀、水銀、ヒ素、亜鉛など）が発見されていました。

歴史上、一番最初に発見された元素として文献に登場するのは、1669年に発見されたリンでした。

それ以来300年を過ぎた現在、90を超える自然のミネラルが発見されており、人工的に作られた元素も20数個あって、全部で111もの元素が存在することが知られています。

現在、112番目の元素が発見されたとも伝えられています。

元素の発見と利用の歴史

ところで、人類が最初に手に入れた元素は何だと思いますか？人類が火を手に入れた原始の時代、木を燃やした炭が偶然に焚き火のまわりの岩石から「金」をもたらしたのではないかと考えられています。

金はイオン化傾向が低く、火を使いはじめた原始人類は岩石などに含まれる金イオンを、火で還元することで、簡単に金を手に入れることができたのです。古代の遺跡から金を用いた装飾品が見つかることからそのことは証明されています。

さて、金に続いて人類が手に入れた元素は青銅です。青銅とは銅とスズの合金ですが、金よりも融点が高いのです。そこで紀元前6000年ころ、原始時代より高温の火を使えるようになった中央アジアの高度な文明によって発見され、青銅

器として広がっていききました。

その後、紀元前3000年ころ、西南アジアに起こったヒッタイトという民族によつて鉄の精製技術が発明されました。ここから鉄器時代がはじまります。鉄器は、武器として農耕具として最大限のパワーを発揮し、人類の文明は鉄によつて大いに発展しました。現在でも道具や建物や乗り物など生活のあらゆる部分に鉄が使われており、鉄のない生活は考えられないほどにその影響力は大きかったです。

やがて人類が電気を発見すると、融解電解法という電気によつて金属イオンを還元する技術が考案され、アルミニウムの生産が可能になりました。アルミニウムは航空機や、電車、電気製品、食器などの分野に飛躍的な進歩をもたらしました。つまり元素の面から見ると、現代は「鉄とアルミニウムの時代」と言えるのです。ところで、人類による金属の発見の歴史は、金属の酸化還元電位のプラスからマイナスへの移行の歴史と言えます。金属イオンの酸化還元電位は、金が1.7ボ

ルト、銅が0・4ボルト、鉄がマイナス0・5ボルト、そしてアルミニウムがマイナス1・7ボルトで、還元しやすくて精製しやすい金属から手に入れていった歴史なのです。

生物進化の歴史と元素

人類の道具としての元素の歴史を見てきました。面白いことに、道具としての元素と生物進化の中の金属の利用は、実はまったく逆の歴史となっていたようです。

生命の誕生については、科学的実験に基づいて考察するしか方法がないのですが、生命の誕生に金属元素が果たした役割は大きかったようです。

最初の地球では、強い紫外線や稲妻のもとで、粘土や砂に含まれるアルミニウムやケイ素、亜鉛、銅などの無機元素が触媒となり、大気中に含まれていたさまざまな気体分子を原料として原始生命の原型ができたと考えられています。

実際に上記のような状況で実験をした結果では、アミノ酸や核酸の塩基や糖類な

どが、合成されることが証明されています。

このようにしてDNAやATPなどの核酸類、たんぱく質、脂肪、糖などが合成され、やがて海洋中で生命体として組織化されていったと考えられています。つまり、海は生命の母だったのです。

こうして、生命の原型は原始の昔に誕生したときに、金属元素を自らの生体の重要な部分に、歯車の一部として組み込んだと考えられています。

さて、こうして誕生した原始生命は、エネルギー効率の高い生命活動を行うため、電子をまわりにたくさんもっている金属イオン、特に当時海中に豊富にあった鉄をまず利用したと考えられています。

その後、水の惑星地球にやがて海藻が繁殖し、光合成から酸素を生産するようになりました。酸素は最初海中に豊富にあった鉄と結びついていったが、海中の鉄がなくなると、大気中に放出され始めました。

当初、酸素は反応性が強く生物にとって猛毒でしたが、生物の中でこの酸素の猛烈な反応性を利用して爆発的な運動能力をもつものが出現しました。これらの生

物は酸素の毒性を消すために銅などを利用し坑酸化酵素を体内に作ることで、新しい進化を遂げたのでした。

生命が多様に変化した結果、鉄イオンの酸化還元電位ではカバーできなくなった領域で、銅イオンなどが用いられたと考えられます。

その後、大気中に酸素が増えると、太陽からの強い紫外線と反応して、大気中にオゾン層がうまれました。オゾン層が生まれると、太陽からの強い紫外線が地表に届かなくなり、海の中でしか生きられなかった生物は、地表へと進出していきましました。

こうして陸へと移動した生物は土壌と植物を通して、海洋では少ない他の種類の金属元素も利用するようになり、巨大な進化を遂げていったのです。

こうして、進化の過程でさまざまな金属元素を体内のシステムに取り込み、生物は進化してきました。そして、そうした生物の頂点に、わたしたち人間がいるのです。

ですから、人間やすべての生物にとって金属元素、つまりミネラルとは、生命の

要であると言っても過言ではないのです。

生体に不可欠の微量金属元素（微量ミネラル）

以上で、お話したように、生物の進化は、人類が道具として金属を発見したのとは逆の方向で金属を利用してきたのです。つまり、酸素分子を用いてエネルギー生産の容易な、酸化還元電位の低い金属から利用していったのです。

さて、このようにみえてくると、私たち生物にとって金属元素は、その起源から不可欠のパートナーとして生死を共にしてきた仲間であり、金属元素なくしては人間をはじめ、すべての生命が成り立たないという事がわかってもらえたかと思えます。

ところで、ミネラル（金属元素）は生物の体内に多量に必要なわけではなく、ミネラル以外の成分、例えばたんぱく質や、酵素や、脂肪や、糖類や、DNAやRNAなどをうまく動かすために、生体のシステムの要として、ほんの少量が必要とされているのです。そのため、体のなかでごくわずかに存在する金属元素は一

般に、微量金属元素（微量ミネラル）と、よばれています。

海水の成分と血液の成分

さて、最後に巷でよく言われる、海水と人間の血液（血漿）中の元素濃度の比較をしてみましよう。この表をみると、世界中の学者が言ってるように両者は相対的によく似ていると思われれます。生命体が海洋に起源をもっているということは、この次ページのデータからも推定されています。

地殻・海水・人体・血液の中のミネラル濃度比較表

金属元素	地殻 中の濃度 ppm	海水 中の濃度 ppm	人体 中の濃度 ppm	血液 中の濃度 ppm
ナトリウム	28300	11556	2600	3280
カリウム	25900	380	2200	170
カルシウム	26300	400	13800	99
マグネシウム	20900	1272	400	22
亜鉛	65	0.005	25	1.6
鉄	50000	0.01	50	1.14
銅	45	0.002	4	1.12
マンガン	1000	0.002	1	0.0029
ニッケル	80	0.002	0.03	?
コバルト	23	0.0001	0.04	0.00038
バナジウム	110	0.002	0.03	0.01
モリブデン	1	0.1	0.2	?

右記文献の一部を抜粋させていただきました。

「金属は人類になぜ必要か」 桜井弘著（講談社ブルーバックス）

「元素111の新知識」 桜井弘編（講談社ブルーバックス）

「食べもので若返るー生命はミネラルバランス」 中島常允著（地湧社） ほか

超ミネラル水とは

超ミネラル水の成分

数億年ものあいだ千メートルもの深海に埋まっていたミネラルの非常に豊富な岩石である花崗岩（黒雲母 *Virmiculite*）から濃硫酸抽出法により多種類の金属元素を液状に抽出したミネラル水溶液です。

含まれる多種類の微量ミネラルはとても吸収の良いイオン化ミネラルの状態にな

っており、そのうち22種類の金属元素が確認されています。また、有機物は含まれず、有害な重金属類は検出不可域です。

★地球上に約100種類のミネラルが存在すると言われていますが、その内の重要なミネラル22種類が含まれています。

超ミネラル水原液の分析結果…飲用のための製品は100倍に希釈してあります。
単位 || ppm (ug/ml) N. D. || 検出限界以下

次ページにて、成分表を記載します。

超ミネラル水の成分

ca	カルシウム	420
p	リン	857
mg	マグネシウム	7300
k	カリウム	2111
na	ナトリウム	92.5
se	セリニウム	0.717
si	シリコン	32.1
ge	ゲルマニウム	2.43
zn	亜鉛	30.9
mn	マンガン	204
fe	鉄	8730
エネルギー		0
蛋白質		0

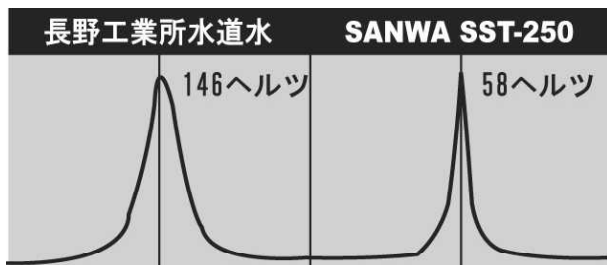
超ミネラル水の成分

cu	銅	5.29
co	コバルト	6.5
ni	ニッケル	2.23
mo	モリブデン	0.811
li	リチウム	5.93
v	バナジウム	54.5
w	タングステン	15.1
ba	バリウム	0.825
ti	チタン	806
al	アルミニウム	12900
脂質		0
脂肪		0
塩分		0

超ミネラル水はクラスター（分子）が小さい水です！

超ミネラル水は、体内にミネラルがより吸収されやすいように、特殊製法により水分子を小型化しています。水分子のことをクラスターといい、水分子の単位として使いますが、このクラスターが小さい程、良い水であると一般的に言われています。

長野工業所の調査結果では、超ミネラル水のクラスターは水道水の平均的クラスターである148ヘルツと比べて、およそ3分の1しかない58ヘルツと大変小さい事が分かっています。つまりクラスターが小さく吸収に優れた水である事が公的機関の調査によって証明されているのです。



水道水の約1/3の大きさのクラスター（水の分子の集団）です。

- ・長野工業試験所の水道水 146ヘルツ
- ・超ミネラル水 58ヘルツ

水分子（クラスター）とは何か、もっと詳しく説明してみましょう。

水は1つの水分子（ H_2O ）ではなくて、いくつかの水分子が水素結合によって結びついた構造になっています。このような水分子の塊を「クラスター（またはクラスター）」といいます。

さらに、水分子の集団であるクラスターが小さい水は、動きがすばやく、細胞組織に浸透しやすく、その結果、生命活動をより活発化して新陳代謝を促す方向に働くと考えられています。

クラスターとはもともと「ぶどうの房」という意味ですが、ここでは水分子（H

20) がぶどうの房状に連なっている状態を指しています。水素結合は超高速で振動・回転することで維持されますから小さなクラスターの水は生体を活性化させる「エネルギーが高い」水と言えるのです。

通常、水のクラスターは平均12個の分子からできていますが、そこにならかのエネルギーが加わると、水の分子結合が分裂してクラスターが小さくなります。この小さな水が、老化を予防したり、健康的な細胞活動を促進したりと、さまざまな働きをしてくれるといわれています。通常の水は分子どうしが勝手気ままに並んでいて、不純物を取り込みやすい構造になっています。クラスターが小さくなることで、そうした不純物が入り込みにくくなると言われています。

クラスターが小さい水は、体内に吸収されやすく、その分普通の水より新陳代謝を活発にさせ、その結果体内で不要になった老廃物を早く排出させる働きが強いと考えられています。

その集団が小さいほど体内に吸収されやすいと考えられています。ですから、クラスターの小さい水を飲むことで、新陳代謝が活発になり、体内の老廃物を速や

かに排泄し、又、血液の水分のクラスターも小さくなり、血液がサラサラとしてくるとも言われています。

そのため、血栓、（血管内にできる血液の塊）ができるのが防がれ、血栓によって起こる脳卒中や心臓病の予防にもつながるとも、言われています。

上に示した図では、2002年に長野で調査されたクラスター値の小さい超ミネラル水と、一般の水道水（長野県で採取）との比較です。

通常の水道水は146HZでしたが、超ミネラル水は58ヘルツと、何と3倍近くもクラスターが小さいという結果になりました。

超ミネラル水は硫酸基を含む水です。

更に、超ミネラル水にはもう一つ重要な成分がミネラル抽出過程で溶け込んでいます。それは硫酸基と呼ばれる成分です。

この硫酸基という成分は劇薬である硫酸の元になっている成分ですが、単体で存在する時は全く無害な物質です。この単独の硫酸のことを「硫酸基」と言います。

この硫酸基という成分は人間の胃にも存在していて胃の粘膜の重要な成分なので、超ミネラル水はこの硫酸基を含むため胃の粘膜となじみやすいという特徴を持っています。

ちなみに、この硫酸基という成分はフコイダンという健康成分にもたくさん含まれています。フコイダンとはモズクやワカメなど海藻類の表面を覆うヌルヌルの成分（これがフコイダン）で、その健康効果が最近注目され始めています。

超ミネラル水の件

超ミネラル水は豊富なミネラルを含むため、適度な量をお飲みください。（過剰に飲みすぎた場合、まれにですが、ミネラルの摂りすぎによる頭痛や吐き気、胃もたれや肌荒れなどのミネラルの過剰症が表れる恐れがあります。）

また人体にはまったく害はありませんが、超ミネラル水は硫酸抽出法で液化している関係でP h（ペーハー）2程度の強酸です。ですから慣れないうちはかなり

酸っぱく感じますので、3〜5倍程度のお水で薄めて飲むと飲み安くなります。

★3〜5倍程度に薄めればお子様でも抵抗なく飲める程度の味になります。

※それでも抵抗のある方は、さらに薄めてお飲み下さい。

★冷蔵庫で冷やしてから飲むと飲みやすくなります。

★お子様の場合100%天然果汁ジュースやサイダーで薄めて飲まれても結構です。

(但し、清涼飲料水やスポーツドリンクなどは糖分の摂取過剰にご注意下さい)

超ミネラル水賞味期限

ミネラル自体は無機質ですので理論的に賞味期限はありません。また多くのミネラルを多量に含む超ミネラル水もかなり長期にわたり品質は保ちますが、直射日光を避けて保管し、開栓後はなるべく早めにご利用下さい。なお、水で希釈して作ったミネラル水も日持ちはしますが、なるべく早めにご利用下さい。(商品ご

との賞味期限はボトルに記載しています。日付をごらん下さい。）

市場にはいろいろな超ミネラル水があるようですが、これらの違いは何でしょうか？他にも類似商品があるのででしょうか？

「超ミネラル水」とは微量ミネラルを一定値含有したミネラル水です。

きちんとした原液と、希釈水、衛生的な設備と希釈技術で作られている超ミネラル水を選ぶようにしてください。その場合は、発売元・製造工場・銘柄・価格・販売方法などがさまざまな製品がありますが、くれぐれも販売価格だけにつられないようにしてください。一部甘味料などを添加している商品もありますので、その場合は内容も違います。

現実に、どのメーカーが、どのような方法で製造しているのかを、よく確認してください。

実態を備えていないにもかかわらず、「超ミネラル水」という名称を名乗っているメーカーが数社あるそうです。インターネットでちよつと調べただけでもそういうメーカーがたくさんあります。ご注意ください。

優れた衛生設備を持つ株式会社クリアロックス

当、ミネラル健康倶楽部のサンミネラル100は、優れた衛生設備を持つ株式会社クリアロックスが、高品質の原液を10年間以上寝かせ、上質の希釈液で希釈し、6回以上のろ過工程を施した製法で作り上げた、最高級の超ミネラル水です。

ただのミネラルウォーターに近いものを超ミネラル水と称したり、メーカーが分からなかったり、添加物を加えたりして販売されているものもあります。類似品にご注意ください。

現在、さまざまな超ミネラル水（と称する商品）が氾濫しているため、超ミネラル水のご購入を検討される方にとって、商品選択に迷われるケースが大変多くなっているようです。お間違えのないようにお選びください。

超ミネラル水普及研究会では、超ミネラル水を必要とされている多くの方に、出

来るだけ分かりやすく納得のいく商品説明や価格や飲用方法などをお伝えできる
よう、新規でご購入戴く方のためのさまざまな情報を提供していきます。また継
続的にご購入戴いている顧客の皆さまに対する顧客サービス面でも今後とも高い
信頼性を維持できるように努めております。

“超ミネラル水普及研究会”

顧問医師の提唱するホリスティック療法と超ミネラル水の有効性についての講演会
のDVD（ビデオ）が出来上がりました（超ミネラル水メーカー会長自身の『が
ん闘病談』も含まれています）。当会ではこの貴重な講義録を会員限定でお譲り
致しております。

詳しくは..

電話 045-664-7747 へ

<http://www.lmineral.com/>

ミネラルバランス

人体のミネラルの種類

近年30年間の検査機器の目覚しい発展により微量元素の分析がきわめて進歩し、人間の生体は約54種類もの多数の元素で成り立っていることがわかってきました。量的な関係は下の表のとおり4種類の元素で約96・7%を占めていることが分かっていきます。

したがって残りの3・3%を50種類という多数の微量元素で占めているのです。しかし、以前の栄養学や医学は、これらの微量ミネラルにあまり関知せずにごろごとしてきました。しかしわずか0・2gの毛髪で、主な26のミネラル値が簡単に迅速に測定できるようになり、医学的にも多くの健康障害や病氣とミネラルの因果関係が解明されてきました。

ミネラルバランスの意味するもの

アメリカの元生化学会会長のウイリアム博士は、生命活動を健全に維持してゆくためには、必須アミノ酸（蛋白質）・ミネラル・ビタミンの各栄養素が相互に関連して「生命の鎖（The nutrition Chain of Life）」がバランスよく形成されなければこれらの栄養素が一つかけても全体の活動力はその不足した栄養素レベルの働きをしないと云っています。

46 栄養素の相関図―「生命の鎖（The nutrition Chain of Life）」

次ページの表を参考に、ミネラルバランスの維持・管理をこころがけてください。

対比ミネラル	理想値より高いと起りやすい病気・症状
ナトリウム(Na) : カリウム(K)	副腎機能不全
カリウム(K) : 鉄(Fe)	筋肉疲労
カルシウム(Ca) : マグネシウム(Mg)	筋肉のケイレン、疲労、衰弱、ビタミンD不足、消化不良、骨粗鬆症など
カルシウム(Ca) : 鉄(Fe)	鉄分が多くなると有毒
カルシウム(Ca) : 銅(Cu)	神経症、変形性障害との関係もある
カルシウム(Ca) : 亜鉛(Zn)	骨粗鬆症、ビタミンD不足(食事で亜鉛分をとりすぎたり、亜鉛を多く含むシャンプー液をふんだんに使用するときなどに起こる)
カルシウム(Ca) : リン(P)	骨や歯がもろくなる、動脈硬化、副甲状腺ホルモンこう進症
鉄(Fe) : 銅(Cu)	貧血症(鉄分が不足するために起こる)、栄養吸収障害、精神障害(ビールを服用している人や女性ホルモンによる治療を受けている患者に多い)
銅(Cu) : モリブデン(Mo)	※食物中にモリブデンが高いと、銅の摂取量の少ない場合、銅欠乏症が早くあらわれるようになる、銅の過剰はモリブデンを失う モリブデンと銅は拮抗する
亜鉛(Zn) : クロム(Cr)	呼吸器疾患、特にアレルギー性ゼンソクと関係がある

対比ミネラル	理想値より高いと起りやすい病気・症状
亜鉛(Zn) : マンガン(Mn)	動脈硬化、糖尿病、不妊症、インポテンツ、 前立腺肥大
亜鉛(Zn) : 鉄(Fe)	指のつめに白い点ができたり、傷口がなかなか 治らなくなる
亜鉛(Zn) : 銅(Cu)	変形性履椎症、変形性腰関節症、動脈硬化、 低血糖症、糖尿病、精神障害、不妊症、前立 腺肥大、傷口が治りにくく、味覚のマヒ
亜鉛(Zn) : セレン(Se)	※セレンは亜鉛と拮抗する、亜鉛の摂取量が多 いとセレン値は、拮抗して低くなる
亜鉛(Zn) : カドミウム(Cd)	緊張性高血圧、肺気腫
セレン(Se) : 水銀(Hg)	ガン、心臓病の発生率が高くなる
リン(P) : アルミニウム(Al)	アルミニウム腫症状、血中アルミニウムが腎 に沈着、腎性骨異常栄養症
カルシウム(Ca) : 鉛(Pb)	吐き気、めまい、関節症、知能低下(鉛が多い とき)
亜鉛(Zn) : 鉛(Pb)	※亜鉛欠乏により鉛の骨への沈着が増大す る、亜鉛と鉛は拮抗する

ミネラルを効果的に取入れるには

人体を健全に維持してゆくのに、ミネラルとビタミンどちらも重要な栄養素です。しかし、ビタミンは有機化合物ですので、人の腸内環境が健全なときには、ある程度必要量を体内で産出することができます。一方、ミネラルは無機質ですので、「食物」、「飲料水」や「サプリメント」など体外から摂取するしか方法がありません。つまり、ミネラルを体外から効果的に摂取することが非常に重要になります。

そして更に気をつけなければならない点は、ミネラルを摂取した時に、咀嚼・消化により、どれだけ効果的に吸収利用されたかという点です。

つまり、十分考慮された食品を摂取しようと努力し、かつミネラル・ビタミンのサプリメントを摂取していても胃腸が悪ければ、毛髪ミネラル検査の結果多くの必須ミネラル欠乏と診断されてしまうのです。実際に35歳以上の人の実に3

0%もが、せっかく食べた栄養素を正常に吸収していないという報告があります。摂取された栄養素は、吸収利用されてはじめて、血液によって必要な特定の組織、細胞に運ばれて利用されることになりますので、下の1〜4に気をつけながら摂取しましょう。

- 1 不適當な胃液の分泌量によって、消化吸収量が妨げられる。
- 2 不適當な腸の刷子縁組織細胞の働きで吸収が妨げられる。
- 3 他のミネラルとの相互作用で、拮抗して吸収が妨げられる。
- 4 そのミネラルの不適當な酸化状態が起こって吸収利用されない場合がある。

参考文献..

- 「金属は人体になぜ必要か」 桜井弘著（講談社ブルーバックス）
「元素111の新知識」 桜井弘編（講談社ブルーバックス）



第四章

主要ミネラルの特徴

カルシウム (Ca)

主な働き…骨・歯などの硬組織を作ります。

血液の凝固、心筋の収縮にも作用。神経の興奮を押さえる働きがあるので、イライラに効果があるといわれています。

欠乏症…

歯、骨が弱くなる。十分に成長しない。(ビタミンDが不足するとカルシウムの利用が悪くなり欠乏症を起こしやすい。)

カルシウムは日本人に最も不足しやすい栄養素です。カルシウムの所要量は年齢・性別などにより違ってきますが、成人で1日600mg、幼児で400mg、成長期の子供の場合は500〜900mgです。

体重の割合からすると、大人より子供の方が多くのカルシウムが必要です。また妊婦の場合は、胎児の発育のために1000mg、授乳している女性では1100mgが必要で、高齢者でも600mg以上を摂取する必要があるといわれています。

います。

体内のカルシウムは、99%が骨や歯に蓄えられています。そして残りの1%が、血液中や筋肉、内臓、神経などのあらゆる組織に存在し、組織の安定をつかさどる代謝機能系でたいへん重要な役割を果たしています。

血液中のカルシウムが不足すると、骨などからカルシウムが溶けだし、血液中のカルシウム濃度を一定に保つような仕組みになっています。

欠乏すると、骨や歯の発育が遅れたり、手足の麻痺や筋肉のけいれん、イライラやストレスを受けやすくなります。

カルシウムを多く含む食品は、牛乳、乳製品、小魚、小松菜、海藻類、豆腐、大根の葉などです。

マグネシウム (Mg)

主な働き…筋肉の収縮を抑える働きがあるので、脳梗塞や心筋梗塞を防ぐといわれています。

欠乏症…血管が拡張して心悸亢進を起こす。けいれん・昏睡。

マグネシウムは心臓発作を防ぐだけでなく、月経前症候群や高血圧、不整脈、ぜんそく、腎臓結石を改善するスーパーミネラルとよばれています。

マグネシウムは血液にあるカルシウムの作用を助けたり、ビタミンB郡とともにエネルギー代謝や核酸の合成にかかわるなど、300種もの酵素の働きを助けています。

マグネシウムとカルシウムは1…2が理想とされていますので、このバランスで摂取するのが良いとされています。

マグネシウム不足によって引き起こされる症状には、悪心、筋肉に力が入らない、いらいら、心電図異常などがあります。

鉄 (Fe)

主な働き…血液の成分であるヘモグロビンに含まれます。月経のある女性や妊婦に鉄欠乏性の貧血が起こりやすく注意が必要です。食事で十分に摂取している場

合には取り過ぎに注意しましょう。心疾患などのリスクが高まるといわれています。

欠乏症…貧血。疲れやすく怒りっぽくなる。発育が遅れる。

鉄は酸素と結びつきやすいため、酸素を体中に運びます。この鉄を機能鉄といい、残りは機能鉄の不足を補うために肝臓などに蓄えられる貯蔵鉄です。機能鉄は、赤血球のヘモグロビンや筋肉中のミオグロビンの成分となって、体の各器官に酸素を運びます。

貧血の症状は機能鉄の不足で起きるのではなく、貯蔵鉄が不足して初めて表れ、疲れや息切れ、動悸、めまい、頭痛などが生じてきます。このようなはつきりした症状が出なくても、機能鉄が不足していることもあります。

健康な成人男子では4gの鉄が存在していますが、1日に約1mg失われていきます。毎日失われる鉄はその分食事で補給しなければなりません。一般的に1日に必要な鉄の量は、吸収率を考慮して10mgです。

食品に含まれる鉄には、肉や魚などの動物性食品に多いヘム鉄と、野菜や穀類に

含まれる非ヘム鉄があります。ヘム鉄の吸収率は15〜25%ですが、非ヘム鉄は2〜5%しかありません。非ヘム鉄はビタミンCと一緒に摂ると吸収率が高まります。

リン(P)

主な働き…歯・骨などの硬組織を作ります。しかし、過剰に取りすぎると骨粗しょう症の原因になります。加工食品に多く含まれているため現代人は取りすぎているといわれています。

欠乏症…歯、骨が弱くなる。骨折を起こしやすくなる。

リンはカルシウムと結合して骨の主成分となります。また、核酸を構成し細胞の成長や神経・筋肉の機能の正常化に関わります。通常の食事ですべて摂取できますので不足することはありません。

体内のリンの85%は骨に含まれます。リンが多いとカルシウムの代謝に障害が出ます。

リンとカルシウムのバランスは1・1が理想とされていますが、日本人のリンの摂取が1・3gであるのに対し、カルシウムは所要量0・6gの8割程度しか満たせていません。

リンが過剰になるのは、清涼飲料水や加工食品に添加物として多量に含まれているためです。リンを摂りすぎるとカルシウムが骨から溶けだし、血液中に放出されます。

さらに1日の摂取量が2gを超えると、副甲状腺機能亢進症や骨代謝障害などの過剰症が出やすくなります。

ある専門家は、牛乳を飲まずに炭酸飲料を飲むと、カルシウムの摂取量が減り、リンが増えるという最悪の事態を招くと指摘しています。

銅 (Cu)

主な働き…骨髄でヘモグロビンを作るときの鉄の働きや腸管からの鉄の吸収を助けます。銅は亜鉛と体内でバランスを取っています。

欠乏症・貧血・骨異常・脳障害

銅はしなやかで強い結合組織を作るとともに、脳内の神経化学物質を合成したり、筋肉や神経、免疫系を機能させるといった重要な働きがあります。

銅が欠乏した動物は、心臓や血管がもろくなり、心不全や大動脈破裂が起こり死亡します。

また、骨の結合組織が網目構造となるために銅が必要で、カルシウムが骨に沈着する土台になります。銅不足の動物には、骨粗鬆症に似た軟骨の破壊が起こる例もあります。

骨粗鬆症の女性は、強い骨を持つ女性に比べ、銅の血中濃度が低いことが分かっています。

さらに、銅は鉄と相互に作用するため、銅が欠乏すると貧血になる場合があります。

銅は、貝類、甲殻類、ナッツ、ココア、豆、きのこ類に多く含まれています。

ヨウ素 (I)

主な働き…甲状腺ホルモンの主な成分です。不足すると甲状腺が肥大化する甲状腺腫の原因になります。放射線を浴びた時に放射性ヨウ素が甲状腺に蓄積して発ガン作用を抑えると言う働きがあります。

欠乏症…甲状腺腫

ヨウ素の欠乏は直ちに甲状腺ホルモンの欠乏を招きます。これが原因になって腫瘍になることもあります。また幼児期・新生児期に甲状腺ホルモンが欠乏すると、知能の遅れや発育障害をとまなうクレチン病となつてしまいます。

ヨウ素は海産物に多く含まれている他、海に近いところでは、水や野菜などからも取れるので、四方を海に囲まれた日本では欠乏症はほとんどありません。

ヨウ素は、人体にとって必須微量元素であるだけでなく、医薬品としても利用価値が高いです。ヨウ自体に殺菌・坑ウイルス作用があるので外用の殺菌消毒にヨードチンキ、ヨードホルムなどが使われています。

マンガン (Mn)

主な働き…骨・肝臓の酵素を活性化します。骨の生成を促進します。

欠乏症…骨の発育不十分。中枢神経障害。

体重70kgの成人には、およそ12mgのマンガンが存在する。成人は0・4mg〜10mgのマンガンを体に取り込んでいると考えられています。

マンガンが哺乳動物に必須であることが分かったのは1931年のことで、マンガンが欠乏するとメスのラットに神経障害が生じて子供が育てられなくなったり、オスのラットの睾丸が萎縮するなどの症状が出る事が報告されています。

人間の場合、マンガンが欠乏することはほとんどありません。逆に過剰症として、マンガン鉱山やマンガンを使った精錬工場や乾電池製造工場などで働く人に、頭痛、倦怠感、運動機能障害、言語障害などが見られることがあります。

この場合の治療薬としては、キレート作用を応用してマンガンを対外に除去する化合物(カニのはさみのようにマンガンを挟んで対外に出て行く成分)が用いら

れています。

マンガンは、多くの酵素活性を促進する作用をもっています。また、活性酸素を分解するSODの中にはマンガンを酵素活性の中心にもつものもあります。

若年性の糖尿病患者がアルファアルファの葉を食べて血糖調節できたことをヒントに、マンガンの血糖降下作用を調べたところ、動物実験ではこの効果が確認されています。

セレン (Se)

主な働き…強力な抗酸化作用。心臓病や動脈硬化、老化の防止に重要な役割をはたしているといわれています。日本人で不足している人は少ないようです。

欠乏症…克山病（子供の心不全。慢性・急性ともにある）、動脈硬化、心筋症が起りやすくなる。

セレンは、イオウ (S) とテルル (Te) のかげに隠れて、当初未発見のままでしたが、1817年にテルルに似た未知の元素として、スウェーデンの学者によ

り発見されました。さらにセレンは1969年に哺乳動物にとって必須ミネラルであることが証明されています。

セレンはまた、性質的にイオウにも似ています。そのため、セレンを摂りすぎると、たんぱく質や核酸、複合糖質中のイオウ原子が、セレン原子と置き換えられて、正常な機能を損なったり、イオウ化合物の代謝が拮抗的に制御される結果、毒性につながる可能性があることが分かっています。

古くから牧草地帯の家畜に方向感覚を失う病気が知られていましたが、これはセレンを濃縮する植物であるムラサキゲンゲ属の植物を家畜が食べて中毒を起したものでした。実は、このことは「東方見聞録」で有名なマルコ・ポーロの文献にも出てくる有名なお話です。

セレンには、以下のような興味深い生理作用が2つ発見されています。

(1) 抗炎症作用

傷や潰瘍などが出来て炎症が発生すると、炎症を防ぐために好中球やマクロファ

ージが集まってきて大量の活性酸素を放出しますが、これによって逆にますます炎症が広がることがあります。そこで、活性酸素種を効果的に消去することが出来れば炎症は治ると考えられます。

人の赤血球には、活性酸素のひとつである過酸化水素を分解する酵素が存在しますが、その酵素（グルタチオン・ペルオキシターゼ）の活性中心にセレンが存在するため、セレンには高い抗炎症作用があると考えられています。

(2) 免疫促進効果

必須微量元素の摂取量として十分な0.1ppmを上回るセレンをマウスに投与すると、赤血球凝集能や溶血球形成能などの一次免疫応答の顕著な促進が観察されています。

また、セレンには水銀と拮抗作用のあることが知られています。ラットを使った実験では、ラットに水銀のみを与えると100%死んでしまいますが、水銀と同時にセレンを与えると100%生き残ることが確認されています。

亜鉛 (Zn)

主な働き…さまざまな酵素やホルモンなどの働きを助ける重要なミネラルです。
欠乏症…味覚障害、皮膚炎、脱毛、性機能障害、うつ症状。

亜鉛の必須性は、1934年に動物での欠乏症が報告されましたが、人に関しての確認は1960年代以降になってからでした。1961年にイランやイラクで、亜鉛の欠乏により成長が止まる小人症が発見されました。

さらに、亜鉛の欠乏により、第2次性徴の発育不全や、鉄欠乏性の貧血が起こることが報告されています。

その後も1973年には遺伝的な病気である腸性肢端性皮膚炎や、ある種の脱毛が、翌1974年には味覚・聴覚障害が亜鉛の欠乏症であることが明らかになりました。

亜鉛の1日の必要量はおよそ15mgと言われていますが、不足しがちなミネラルであると考えられており、亜鉛を含む錠剤や自然食品がたくさん販売されてい

ます。

亜鉛の過剰症は起こりにくいようですが、缶詰から溶け出した亜鉛による中毒発熱・吐き気・腹痛・下痢などが知られています。

生体系中の亜鉛の含有量は遷移金属としては鉄に比べて多く、体重70kgの人でおよそ2gくらいと言われています。また、現在までに200を超える亜鉛を含むたんぱく質が知られおり、それらは、動物植物、微生物界に広く分布しています。

近年、細胞発生や分化をつかさどる重要な遺伝情報の保存・発現・制御・調節に関わっている亜鉛たんぱく質も発見されており、ますます重要なミネラルとの認識が強くなっています。

クロム (Cr)

主な働き…糖や脂肪の代謝に利用されています。インシュリンの感受性を高めるという作用があるといわれています。

欠乏症・動脈硬化、糖尿病の一因となることもあります。

クロムは、体重70kgの成人には、およそ2mg程度存在するミネラルで、実験動物では微量のクロムが糖やコレステロールの代謝に不可欠であることから、1959年に必須性が認められています。

近年の医療の進歩とともに、人工栄養が考案され、経口的に栄養が摂れない人用にいられています。その中にはたんぱく質、資質、糖質、ビタミンのほか、さまざまな必須微量元素が加えられています。たとえば、鉄、銅、亜鉛、ヨウ素、セレン、モリブデン、コバルト、クロムなどが加えられています。長期間、人工栄養に頼らざるを得ない場合、クロムが無ければ糖尿病にかかるからだの説明されています。

ところで、六価クロムの毒性は昔からよく知られていて、人での致死量はおおよそ0.5〜1gといわれています。六価クロムを使う工場で働くひとには、鼻中隔穿孔症という病気が多く、ついには肺癌で亡くなる人もありました。

さらに最近の研究によると、六価クロムが三価クロムに還元される途中で、五価

クロムがかなり作られていることが分かってきました。この五価クロムも六価クロムと同様、DNAを切断する作用のあることが分かっており、発ガンの原因物質ではないかとも疑われています。

モリブデン (Mo)

主な働き…さまざまな酵素の構成物質となっている。日本人の食生活で不足することはほとんどないと考えられています。

欠乏症…はっきりとした欠乏症はありません。

モリブデンは人間にとって必須元素で、キサンチンオキシダーゼや亜硫酸オキシダーゼなど、重要な酵素の活性部位に存在します。

モリブデンは重金属の中では毒性が低く、体内に蓄積されませんが、それは水溶液中に安定な形で存在するためだと考えられています。

成人のモリブデン必要量は1日におよそ0.1mgで、通常は足りないことはほとんどありません。母乳にも多く含まれていて、牛乳には1リットル中に25〜

75 mg ものモリブデンが存在します。

米国のコロラド州にモリブデンノースという病気が家畜に起こることが報告されています。この地方の牧草にモリブデンが多過ぎるために起こるモリブデンの過剰症で、体重の低下・食欲減退・貧血・授乳不良・不妊・骨粗しょう症などが起こります。

これは実は、体内のモリブデンのレベルが上がると、銅のレベルが低下することから、銅とモリブデンは互いに拮抗関係にあることが分かっており、銅の欠乏症になるためとされています。そこで、治療法として銅の化合物を混合した肥料が家畜に与えられています。

カリウム (K)

主な働き…心臓機能、筋肉機能を調節する重要なミネラルです。多く取ると血圧が下がります。カリウムはナトリウムとのバランスが重要で、日本人はナトリウムを多くとるので高血圧を防ぐためにもカリウムをきちんと取る必要があるとい

われています。

欠乏症・筋無力症・まひ状態、知覚がにぶくなる。

カリウムは血圧降下作用があります。その仕組みは、体細胞からナトリウムを排泄して血圧を下げると考えられています。この作用は大きく、カリウム不足で高血圧症になる患者もいるとされています。

またカリウムは筋肉の収縮と弛緩の調整に働きます。不足すると適正に調整されなくなり、疲れやすくなったり、心臓の収縮の乱れ、しびれ、嘔吐、いらいらななどが現れてきます。夏バテは、大量にかく汗とともにカリウムが失われ、低カリウム血症となって発症することが多いのです。

ストレスやコーヒー、酒や甘いものはカリウムを減らします。

ナトリウム (Na)

主な働き…筋肉・神経の興奮を弱める働きがあります。カラダの体液のバランス（浸透圧）を調節する重要なミネラルです。日本人は、塩分を十分にとっている

のでサプリメントで摂取する必要はありません。ナトリウムを取りすぎると高血圧になるので減塩の必要があります。

欠乏症…食欲減退、筋肉は脱力する。極端な欠乏症は倦怠、無欲、失神。

ナトリウムは体内の水分量を調整し、神経や筋肉の信号伝達をスムーズにさせ、いろいろな物質が細胞に入り出すのを助ける役目があるため、必要不可欠な成分です。

一般的に、ナトリウムは多く摂りすぎると高血圧になりやすいといわれています。しかし、高血圧の人がナトリウムの摂取を制限すると、血圧が5 mmHg下がり、心臓病や脳卒中の危険度が下がるという結果がある一方で、低塩食を摂っても半数の人では血圧が下らないという報告もあります。

アメリカのコネル大学などの研究では、低塩食を摂る高血圧患者の心臓発作回数は、高塩食の高血圧患者の4倍という結果が出ています。ナトリウムの摂取量が低いほど心臓発作の危険性が高いという皮肉な結論が出たわけです。

ドイツのボン大学の研究では、1978歳の正常血圧の男女147人に、食塩摂

取量を1日1000mgとした低塩食を7日間摂らせた結果、血圧低下が17%、血圧上昇が16%、変化なしが67%でした。さらに、LDL(悪玉)コレステロールが著しく増えました。

アメリカの研究者の間では意見が分かれています。ナトリウムが体内で正常に機能を発揮するための必要量は、500mg以下と考える研究者もいれば、4000mg以上でも問題なく処理できるという研究者もいます。

オレゴン保健大学のマツキヤロン博士は、「カリウム、カルシウム、マグネシウムの相対的な欠乏が食塩への感受性を決定している可能性が高い」と言っています。

コバルト (Co)

主な働き…コバルトはビタミンの1種であるビタミンB12の最も重要な構成成分です。ビタミンB12はきわめて多くの酵素系に対して、酵素の活性を高めるための補酵素として働き、また造血系においてはヘモグロビンの合成の段階に関

係すると言われています。

欠乏症・悪性貧血、食欲減退、体重減少など。

生物にとってコバルトが必須元素であることは、牛や羊が貧血となり、ついには死んでしまうことから研究が始められ、1935年にその必須性が証明されています。

動物が食べる牧草にまく化学肥料などに少量のコバルト化合物を混ぜておくと、牛や羊の「やせ病」のような重い病気を予防できることが知られています。

貧血を防ぐには、鉄だけではダメで、鉄のほかに銅とコバルトが必要なことが明らかにされましたが、そのことが、1948年にビタミンB12が発見されるきっかけとなりました。

コバルトは人をはじめ、あらゆる生物の必須元素です。体重70kgの成人の場合、およそ1.5mgのコバルトが存在し、食物を通して1日に0.05〜1.8mgのコバルトが体に取り込まれています。

コバルトは腸管からよく吸収され、特に鉄が欠乏すると、鉄とコバルトの化学的性質が似ているために、さらによく吸収されます。取り込まれたコバルトは主に骨・すい臓・肝臓などに蓄積されます。ちなみに、コバルトの過剰症はよく知られていません。

右記文献の一部を抜粋させていただきました。

「金属は人類になぜ必要か」桜井弘著（講談社ブルーバックス）

「元素111の新知識」桜井弘編（講談社ブルーバックス）

「食べもので若返るー生命はミネラルバランス」中島常允著（地湧社）ほか

ミネラルの所要量について

ミネラルの欠乏症を防ぐための1日に必要な摂取量と食品

名称 (元素記号)	1日の所要量 (成人の場合)	許容上限	含まれる 主な食品
カルシウム (Ca)	600mg	2500mg	ケール, ブロッコリー, 小魚, 乳製品(スキムミ ルク, チーズ他), 大豆製 品など
マグネシウ ム(Mg)	男性: 18-29歳:310mg 30-49歳:320mg 50-69歳:300mg 70歳以上: 280mg 女性: 18-29歳:250mg 30-49歳:260mg 50-69歳:260mg 70歳以上: 240mg	18-9歳: 700mg 50歳以上: 650mg	玄米, アボガド, ほう れんそう, たら, オー トミール, ヨーグル ト, バナナ, 青海苔, 米 ぬか, 干し昆布, ごま など
鉄(Fe)	男性:10mg 女性:12mg	40mg	牛肉, 大豆, あさり, ほう れん草, レバー, ひ じき, 海苔など
リン(P)	700mg	4000mg	鮭, スキムミルク, 鶏 の胸肉, オートミール, 加工食品, 卵黄, す るめなど
銅(Cu)	男性:1.8mg 女性:1.6mg	9mg	貝類, 甲殻類, ナッツ, ココア, 豆, きのこと類, 生レバー, チョコレート など
ヨウ素(I)	150 μ g	3mg	ロブスター, エビ, カ キ, パン, 牛乳, 昆布, わかめ, 海苔, 寒天, イ ワシ, カツオなど

名称 (元素記号)	1日の所要量 (成人の場合)	許容上限	含まれる 主な食品
マンガン (Mn)	男性: 18-69歳:4mg 70歳以上: 3.5mg 女性: 18-29歳:3mg 30-69歳:3.5mg 70歳以上:3mg	10mg	缶詰のパイナップル ジュース,小麦ふす ま,小麦胚芽,ナッツ, ココア,貝類,抹茶,煎 茶,ごま,玄米など
セレン (Se)	男性: 18-29歳:60 μ g 30-49歳:55 μ g 50-69歳:50 μ g 70歳以上: 45 μ g 女性: 18-9歳:45 μ g 70歳以上: 40 μ g	250 μ g	ロブスター,あさり, カキ,未精製の穀類, 毛がに,イワシ,カレ イ,カツオ,昆布,卵な ど
亜鉛 (Zn)	男性: 18-29歳:11mg 30-49歳:12mg 50-69歳:11mg 70歳以上: 10mg 女性: 18-29歳:9mg 30-69歳:10mg 70歳以上: 9mg	30mg	牡蠣,牛肉,ラム肉, 卵,ナッツ,ヨーグル ト,ごま,米ぬか,アー モンドなど

名称 (元素記号)	1日の所要量 (成人の場合)	許容上限	含まれる 主な食品
クロム (Cr)	男性: 18-49歳:35 μ g 50-69歳:30 μ g 70歳以上: 25 μ g 女性: 18-49歳:30 μ g 50-69歳:25 μ g 70歳以上: 20 μ g	18-69歳: 250 μ g 70歳以上: 200 μ g	ビール酵母, ブロッコリー, ハム, ブドウジュース, こしょう, ハマグリ, 鶏肉, 卵, 玄米など
モリブデン (Mo)	男性: 18-69歳:30 μ g 70歳以上: 25 μ g 女性:25 μ g	250 μ g	豆類, 未精製の穀類, 牛乳, 乳製品, 濃緑色の葉野菜, 海藻, 玄米, 白米, 野菜, 肝臓, 貝類など
カリウム (K)	2000mg	設定なし	乾燥したあんず, プルーン, バナナ, ほうれんそう, 動植物類に豊富に含まれる. 特に果実類に多い
ナトリウム (Na)	設定なし	設定なし	チーズ, 肉類, 貝, エビ, かに, パン, ドレッシング, 食塩, しょうゆ, 味噌, 梅干など
コバルト (Co)	設定なし	設定なし	肉類, レバー, 牡蠣, 貝類, 乳製品, 魚介類, 納豆, もやしなど

(出典：厚生労働省 第6次改定日本人の栄養所要量

2000年4月～2004年3月適用)

ミネラルと人体の関係

次ページの表を参考に、ミネラルと人体の関係をご理解ください。

頭皮に異常	亜鉛・カルシウム・銅・マンガン
気分がよくない	鉄・亜鉛・カルシウム・カリウム・マグネシウム・ナトリウム・リン
容色が衰える	鉄・亜鉛・カルシウム・マグネシウム・カリウム・銅
疲れやすい、 体調が悪い	鉄・亜鉛・カルシウム・マグネシウム・カリウム・ナトリウム・マンガン・銅・リン
血圧に異常	鉄・亜鉛・カルシウム・マグネシウム・カリウム・ナトリウム
心臓が不調	鉄・亜鉛・カルシウム・マグネシウム・カリウム・銅・バナジウム
胃腸が弱い	マグネシウム・カルシウム・カリウム・亜鉛・鉄・銅・リン・ナトリウム・マンガン
手足筋肉の不調 と痛み	鉄・亜鉛・カルシウム・マグネシウム・ナトリウム・銅・リン・カリウム・マンガン
ガンの心配	カルシウム・マグネシウム・カリウム・亜鉛
子供の発育が遅れる	カルシウム・マグネシウム・カリウム・鉄・銅・亜鉛・リン・マンガン
目が弱い	カルシウム・マグネシウム・亜鉛
口に異常がある	カルシウム・マグネシウム・カリウム・亜鉛・鉄・銅・リン・バナジウム
皮膚に異常	亜鉛・鉄・カルシウム・銅・マグネシウム・カリウム
性に異常	カルシウム・マグネシウム・カリウム・亜鉛・マンガン・銅
肝臓が弱る	カルシウム・マグネシウム・亜鉛・マンガン
アレルギーに 悩む	カルシウム・マグネシウム・カリウム・亜鉛・マンガン

ミネラルの効果役割

ミネラルの効果と役割については、次ページの表を参考にしてください。

ミネラルの種	役割効果
カルシウム	骨や歯の形成・酵素の触媒、血液の凝固を促す・神経細胞を守る
リン	A T P (アデノシン) リン分解酵素、エネルギー代謝・酸アルカリのバランス調整
マグネシウム	ビタミンA、B、C、D、Eの保持と活性化・酵素の触媒・精神、安定・骨肝臓筋肉に必要な栄養素・コレステロールの沈着・糖尿病の予防・酸アルカリのバランス調整・腎不全の予防
カリウム	代謝促進・生理機能の正常化、神経刺激の伝達・酸アルカリのバランス調整
ナトリウム	代謝促進・神経のコントロール・生理機能の正常化
リチウム	ナトリウム代謝促進・神経鎮静効果・そう鬱病の予防
アルミニウム	骨や歯の形成・酵素の働きを強める
ゲルマニウム	制ガン作用・酵素の働きを強める
鉄	赤血球・血液中の酵素の運搬、貧血予防
マンガン	炭水化物・蛋白質の合成・脂肪の吸収・血液の生成・酵素の抗生物質・ビタミンの働きを助ける
亜鉛	酵素の構成物質・ホルモンの構成要素・蛋白質の合成・コレステロールの調整・動脈硬化の予防・傷の治療・インシュリンの成分

ミネラルの種	役割効果
銅	酵素の構成物質・鉄と組んで赤血球を作る心臓病・糖尿病の予防
モリブデン	酵素に不可欠な物質・成長促進、尿酸の生成・癌の予防
クロム	糖尿病・高血糖症・動脈硬化症、成長の遅れ・角膜障害
コバルト	ビタミンB12構成物質・貧血防止
バナジウム	脂質の代謝・コレステロールの正常化
ニッケル	核酸の安定・細胞膜の構成・肝臓・生殖に必要・酵素の働きを助ける
ケイ素	成長促進
セレンウム	老化防止・成長促進・制ガン作用・皮膚病治療・ビタミンE機能を助ける・強精(精子増量)・視力回復

超ミネラル水ボトルドウォーター

ボトルドウォーターとは

「超ミネラル水普及研究会」のサンミネラルの、製造委託工場である、株式会社クリアロックスが製造する飲料用のミネラル製品は、保健所認可のもと「ボトルドウォーター」として製造しています。

何故、ボトルドウォーターを採用するのか？お答えします。

ミネラルウォーターの種類について勉強しましょう！ミネラルウォーターは以下の4種類に分類されます。

品名	原水	処理方法
ナチュラルウォーター	特定水源より採水された地下水	ろ過、沈殿および加熱殺菌に限定
ナチュラルミネラルウォーター (市販のミネラルウォーターは大半このタイプ)	特定水源より採水された地下水のうち、地下で滞留または移動中に無機塩類が溶解したもの。 (鉱水・鉱泉水など)	
ミネラルウォーター	ナチュラルミネラルウォーターの原水と同じ	ろ過、沈殿および加熱殺菌以外に次に掲げる処理を行ったもの。・複数の原水の混合・ミネラル分の調整・ばっ気・オゾン殺菌・紫外線殺菌など
ボトルドウォーター	飲料水の基準を満たしている水（純水・蒸留水・河川の表流水・水道水など）	処理方法の限定はなし

国内で市販されているミネラルウォーターの大半は、ナチュラルミネラルウォーターです。

ボトルドウォーターの説明は上記表の通りです。表を見る限りでは、基準を満たしている原水を利用し、ある程度の処理を

すればボトルドウォーターとなるのか？

とレベルが低いように感じられる方もいるのでは？ ある意味そうです。

ただ、逆に言えば、ボトルドウォーターは処理方法の限定がない事から、他の3種類では到底真似のできない、最高品質の水をつくる事も可能なのです。

ですから、弊社では他の枠ではおさめられない技術を駆使することで、最高品質の水を創り出すためにボトルドウォーターを選択しているのです。

おわかりいただけましたか？

株式会社クリアロックスの技術

株式会社クリアロックスの持つ技術の一つとして、水の性質を変える事ができま

す。

シーマロックスと呼ばれる花崗岩イオン化ミネラルを利用し、特殊製法を駆使しながら、原水にバランス良く加える事により、水自体の性質を変え、より良い水を創り出す事に成功しました。

現在、国内の河川・湖・井戸などは、塩化物や窒素、水銀など環境汚染が進み、まともに口にすることはできません。

また、水道水においては、水道法すれすれの水が存在し、更には濾過処理を行う事で、ミネラル成分などの良い物自体も、とってしまっています。

また、市販されているミネラルウォーターでは、バナジウムウォーターやゲルマニウムウォーターなど、一つのミネラル成分を中心に製造販売されているものもあります。それでいいのでしょうか？

ミネラルとは、多種類のミネラルを、バランス良く摂取することが大事なのです。ミネラル同士の相互関係や、ミネラルを、他の栄養成分との関わりがあるように、偏ったミネラルだけを、摂取しても、あまり意味がないのです。

弊社が製造する水は、環境汚染物質を極限まで取り除き、酸化した物を取り除き、その上で多種類のミネラルをバランスよく加える事で、健康を意識した最高品質の水に、仕上げています。

癌代替治療と微量ミネラル療法

癌の代替治療には多くの種類がありますが、ファステイング（断食）食養生を中心としたもの、免疫を高めるため又癌は熱に弱いところから温熱療法を中心としたもの、指圧などのように手技によるもの、瞑想や笑い等等メンタルを重視するもの、

自己免疫を高めるという意味では、施術を受けた人が心地よく感じるというのが非常に重要です。

我々はこの代替治療にぜひ微量ミネラルの摂取（通常の5〜10倍）を取り入れることを主張するものです。

微量ミネラル（超ミネラル水）の大量投与で末期癌から生還した事例は、数多く

報告されています。

微量ミネラルは、細胞の活性化、自然治癒力の増大に、大きな力を発揮するので
す。

日常生活の中で、きちつとした食事療法、ストレスの抑制などが不十分でも、微量ミネラル水を適量摂取することで、あなたの健康に十分な効果が期待できます。

おわりに

おわりに

今朝の読売新聞の第一面に「がん次世代薬 国産拠点」という記事がありました。相変わらず、癌細胞を攻撃して殺す、という発想にもついたものです。

何十兆という市場規模が見込まれるそうですが、その裏にはまた、苦しんで死んでゆく、多くの癌患者のうめき声が聞こえてくるようです。

同じ紙面に、歌舞伎俳優の大看板、市川団十郎さんが六十六歳で死去とありました。

死因は肺炎ということですが、再三の白血病の治療で受けた、「フルコースのデイナーのような」抗がん剤治療が、深く彼の心身を苦しめ傷つけていたからに違いないと思います。

誠実にまじめに、「地獄の亡者のような苦しみ」の治療を受けられていたということですが。誠に、痛ましい限りです。

もういい加減に、同じようなアプローチが、良い結果を生まないのであれば、原点

にたちかえって、千島喜久男博士の学説に耳を傾ける、または数千年の歴史がある、東洋医学の治療法を研究するなどの、知恵が湧かないものなののでしょうか？

医師を目指す方は頭の良い、優秀な方が多いはずですが、ヒューマニズムに燃えて、この道を目指された方も多いのではないのでしょうか。

業界の利益、病院の経営、自身の体面、等いろいろと問題はあることと思います。が、一日も早く、千島博士の標榜する「哲科学」の理念に共感し、「医は仁術」の原点に立ち返っていただけることを、心より願うばかりであります。

*最後に、今回の出版で多くの書籍の著者の方々に、ご教示をいただきました。

次に、著書名とお名前を記して、心から感謝申し上げます。

参考文献

*順不同です

「抗がん剤で殺される」 船瀬俊介著 家伝社

「癌では死なない」 鶴見隆史 鶴見クリニック院長 他三名共書

「よみがえる千島学説」 梓山紀一著 なずなワールド

「『ガン呪縛』を解く」 稲田芳弘氏著 Eco・クリエティブ

「患者よガンと闘うな」 近藤 誠博士著 文春文庫

医学革命の書「血液と健康の知恵」 千島喜久男著 地湧社

「ガンの疫学と血液」 千島喜久男著 地湧社

「千島学説入門」 梓山紀一著 地湧社

「免疫革命」 新潟大学教授 安保 徹著 講談社インターナショナル

「病気になるない生き方」 新谷 弘実著 サンマーク出版

ガストン・ネサンのソマチッド新生物学「完全なる治癒」

クリストファー・バード 上野圭一監訳、小谷まさ代訳

「ソマチッドと7147Xの真実」ガストン・ネサンを訪ねて

稲田芳弘著 Eco・クリエイティブ

超ミネラル水で「すべてのガンは完治する」

元松戸保険所所長 医学博士 野島 尚武著 見聞ブック

「荒野のジャーナリスト 稲田芳弘」稲田 陽子著 Eco・クリエイティブ

「癌を克服するために」酒向 猛 医学博士

ガン「消去法」医学博士 森下 敬一著 自然の友社

「新・抗癌剤の副作用がわかる本」近藤 誠著 三省堂

「ボケ、ガン常識を覆せ！」医学博士 小林 常雄著 文化創作出版

「ミネラルと健康の関係」海風診療所院長 沼田光男 医師著 クリアロックス

別冊螺旋「千島喜久男博士伝」梶山紀一、千島恵子著 千島学説研究会

螺旋1〜8号 梶山紀一編著 千島学説研究会

参考文献

- 「驚異の水」 「ロックウオーター」シーマロックスの製法・物性・用途のすべて
ウオーターデザイン研究会 久保田 昌治編 技術出版
- 末期ガン患者100人の記録「ガン革命」加藤 清著 地湧社
- 「免疫を高めると病気は必ず治る」安保 徹、福田 稔監修 マキノ出版ムック
- 雑誌「笑む」ミネラル特集 稲田芳弘編
- 「金属は人類になぜ必要か」桜井弘著 講談社ブルーバックス
- 「元素111の新知識」桜井弘編 講談社ブルーバックス

NPO法人（特定非営利活動法人）

〃超ミネラル水普及研究会〃

理事長 三橋 宣男

“超ミネラル水普及研究会”は、全国で普及活動をしてくださる代理店を求めています。

横浜市中区不老町2-8 不二ビル

電話：045 664 7747

FAX：045 664 7748

ホームページ：http://www.lmineral.com/